投口

明治二十五年一月三版

德富健次郎纂譯

格武電

東京　民友社　發兌

版權所有

584
北京圖書館藏
1907

氏ンデブゴ ドルヤチリ

289
24

13767

格武電の卷首に書す

武雷土傳を讀んで、此の册子に來る者は、恰も激湍迸り、怪巖欹ち、松柏矗立する山徑を過きて、平蕪迢々、草欣ひ、花笑ふの沃野に出るの想ある可し、

古へフヲックス、ボルクの二氏は實に英國曠世の政治家なり、其の始め政治世界に入るや弟兄啻ならず、而して一旦議院に於て、佛國革命の事件に就き相爭ふや、ボ

ルク艶焉として曰く請ふ爾と交を絶たんと、フォックス潸然泣て曰く是れ公事なり、豈に私交に及ぼす可んやと、ボルク聲を厲ふして曰く否々絶つ可しと、余英史を讀んで此處に到る、未た人情反覆の常なきを憾みとせすんはあらす、而して彼の格武雷、武雷土二氏は、抑も何の恃む所ありて其の互に性情行徑を同ふせさるに關せす、相提携し、相裨補し、二十餘年毀譽榮辱の誘惑は急霰の如く身邊を襲へるの政治世界に立ちたる耶、豈に其の胸懷光々洒々中に動く所のものあらさりし耶、抑も献身的の眞骨頭は能く二氏をして黑霧暗雲の上

を高歩せしめたるによる耶、

格氏は世の所謂る英雄にあらす、只實務上より發育したる常情の圓滿に膨脹し來れる巨人なるのみ、故に其の議論をなす往々マンチエスターの綿糸製造所の役夫も敢て奇とせさる所にして、而して雄才權畧のパーメルストン卿の敢て行ふ能はさる所のものなきにあらす、蓋し氏の靈眼は人生自然の常道に直射せり、即ち一身の利害は一家の利害と合躰し、一家の利害は一國の利害と合躰し、一國の利害は天下の利害と合躰するものにして、最少の個人より最大の世界に及ふ、必らす

其中に至緊至要の關紐あるを悟了せり、其の畢生の心事は只た此の關紐を援ひて其の一端より他の一端に及ぼさんと欲〳〵たるにあるのみ、

格氏の愛誦する警句に曰く自由貿易、平和、各國民間の好意(Free Trade, Peace, Good Will among Nations)と、其規摸の濶大なるは彼の烏の戰爭鳶の喧嘩に汲々たる權詐政治家をして驚殺せしむるに足るものあり、而〳〵て焉んぞ知らん、此れ氏か家常の茶飯にして、只た「爾の隣人をは爾自ら愛する如く愛せよ」の、箴言より演繹〳〵來りたるものなるを、

嗟呼最も通常の道理を悟了したるものは、最も高大なる思想を有する人なり、最も通常なる道理を踐行する者は、最も高大なる君子なり、世の後進者の學ふ可きは彼に在らずして此に在り、

然りと雖も其の衆難群謗の衝に立て、慷慨時事を痛論す、或は學ふ可〳〵、其の榮辱、毀譽、憂苦、患難、利害、得喪の重圍中を安歩し、平然として心を動かさず、更らに自家胸中の春風を扇ひて、天下を薫化せんとするに到ては、豈に學ひ易からん哉、

季忠定の句に曰く春鴻秋燕非人力、明月清風長隨我、と

余は此の句を想起する毎に、未た嘗て格氏の人物をして眼前に髣髴せしめすんはあらす、

明治二十二年十二月廿日東京民友社に於て　蘇峯生

目錄

第一章　一生の曉……一
第二章　進歩の時期……一二
第三章　自由貿易(其一)……二四
第四章　自由貿易(其二)……三五
第五章　自由貿易(其三)……六〇
第六章　千八百四十六年より同四十九年に至る……七五
第七章　平和と戰爭(其上)……八六
第八章　平和と戰爭(其中)……一〇一
第九章　平和と戰爭(其下)……一一三
第十章　二年間の退隱……一二〇

第十一章　平和主義は戰爭主義と共に倶に內閣に立べき乎……一二九
第十二章　英佛通商條約(上)……一四二
第十三章　英佛通商條約(下)……一五五
第十四章　終暮の五年間……一七一
第十五章　獻身的の政治家……一八八
第十六章　人物及性向……二〇〇
第十七章　民政の胎內より生れ出たる双生子……二一二

年譜

一八〇四年　ダンフヲルドの茅舍に生る
一八一九年　商館の筆生となる
一八三一年　初めて心を公事に注ぐ
一八三五年　小冊子第一篇を著す
一八三六年　ストックポルト撰擧敗北
一八三八年　穀法排擊の戰場に入る
一八四一年　ストックポルトより撰まれて國會に出づ
一八四六年　穀法廢止の榮冠を戴て大陸を遊說す
一八四七年　巴卿外務の椅子に着平和戰爭端を啓く
一八五〇年　ドンパシフヒコ討論巴卿の第一勝

一八五二年　保護黨內閣に立ち非穀法同盟再興す
一八五三年　戰爭の恐慌英佛の天を覆ふ
一八五四－五六年　黑海戰爭巴卿の第二勝
一八五六年　一生の厄年
一八五七年　支那戰爭巴卿三度大勝利を得
一八五七－五八年　撰擧區を失ふて私宅に隱栖す
一八五九年　巴卿入閣の招誘を辭す
一八五九－六〇年　英佛通商條約締結
一八六一年　北米聯邦大に亂る
一八六三年　タイムス新聞と筆戰す
一八六四年　丁抹獨逸戰爭平和主義の勝利
一八六五年　倫敦の客舍に世を辭す

引用書目

John Morley's "The Life of Richard Cobden".

Speeches by Richard Cobden.

Cobden and Political Opinion.

The Political Writings of Richard Cobden.

格武電

徳富健次郎纂譯

熊本県立図書館蔵書

第一章　一生の曉

ヘーショットの孤村

若し英國の南部に筇を曳くの旅人あらば、其のサッセックスよりまさにハムプシャイルに移らんとする處に於て荒寥たる一の寒村を見るなるべし。丘陵逶迤として斜に村を抱き、森々たる柏楡樅杉の林は桑麻幾頃の田に連なり、鷺鷥常に姿を池水の鑑に照し、天鷄時に曉の夢を破る。滿目蕭條として只彼處此處に散點せる茅屋より立昇る翠烟の次第に碧空に消へ行くを望むのみ。是れ所謂ヘーショットの孤村にして、リ

僻村偉人を生す

チャード、コブデン氏が初めて呱々の一聲を發ちたるは、即此孤村の中なるダンフヲルドてふ一茅舍にてありしなり。余は今此寒村茅舍の一

家系

誕生の時は一家厄難の始

農兒が、六十年の短生涯に於て、難を排し厄を去りて終に一流の人物を迄攀上り、以て安民、濟世の偉功を奏したるの經歷に就て聊叙述する所あらんと欲す。

格武電氏の家系を原ぬるに、古代の英史に有名なるサー、ラルフの支裔にして、貴族の貫籍を有せざれども、亦下等農夫にもあらず、所稱中等民族に屬すべき借地人なり。上世の事固より詳悉を知るに由なしと雖ども、十四世紀の頃に當り家族中より國會議員に擧られたるものあり、また十六世紀西班牙襲來の時に臨み海防費として二十五磅の義捐をなしたる等の事あるを見れば、一家代々令名ありて財産にも乏しからざりしを知るに足れり。然るに第十七世紀の頃居をミッドホルストの邑に定めしより、家運次第に傾きて、一代ハ一代より衰頽し、格氏の父ウ井リアム、コブデン氏が家を嗣げるに當ては已に勞役農夫とまで零落せ

父母の性質

一家流離

り。されば千八百〇四年六月三日格氏が世に生れ出たる時は格武電一家がまさに困難の絶頂に上らんとする時なりき。

ウ井リアム、コブデン氏は稟質正直敦厚頗る仁慈の情に富めども、無氣無力容易に人に欺かれ、其一生の憂は只家貧にして盡く子女を吾膝前に集むる能はざる事の外になかりしといへる程の優柔なる人物なれば、以て一家厄難の衝に當るべくもあらず。其妻名はミリセント、アムバー、鋭慧敏捷、氣力餘りあるの女丈夫なりしが、婦人の纖腕は以て大厦の傾くを支ふる能はず。格氏が五歳の時に及びて終にダンフヲルドを賣却しミッドホルストの郭外に微かなる白屋を購ひ求めて、暫く糊口を凌ぎたれども、此れすら思ふに任せざれば、千八百十四年更に其地面を賣却し、諸處に流寓したる末終にハムプシャイルのウエストミオンに足を駐めたり。然るに貧家子福多の俚諺に漏れず、一家の子女は格氏の上

十歳父母の膝下を離る

にして三兄姉、下にして七弟妹、すべて十一人の多きに及びければ、ウ井リアム氏は之を分つて近隣の親戚に托し、獨り格氏のみ倫敦商人なる親戚に委托す。於是格氏は父母に別れ、同胞に別れ、其愛好せるミッドホルストの村塾を去り、叔父の手により終にヨルクシヤイルの學校に送らる。時に年十歳なり。

學校の境遇

此時は是れ小説家チャールス、ディッケンスが一枝の筆に英國學校の弊習を一掃せし二十年の前なれば、學校てふ王國は猶未だ鞭韃蹈蹴の弊を脱せず。格氏が此間に入りしより、日に〳〵殘忍の取扱を受け、不完全の教育と不充分なる粗惡の食物を給せられ、たゞ好める地理書を繙續して纔に其鬱を洩せるのみ、一たびも舊友を見ず、亦父母を見ず、悲酸痛苦の中に閲し盡す五星霜。千八百十九年終に校を出で、叔父の商館に雇はれて筆生となれり。此を氏が商業世界に入りたる端緒とす。

商館の筆生となりて始めて商業世界に入る・孝友の情

慈母に別る

格氏已に商館に雇はれて聊俸給を得るの身となりしよゝ、早くも父に代りて弟兄妹姉の事を引受け、偶休暇を得れば必ずウエストミオンに到りて父母を慰め、同胞を勵し、以て一家の愁霧を拂ひ去らんことを務む。基督誕生祭には毎に些少の月俸を節して購ひ求めし贈物土産を携へて父、母、兄、弟を欣ばしむるを常とし、亦日永き仲夏の日曜日に倫敦とウエストミオンの中央なる驛路の旅亭に父と相會して、一杯の珈琲に万解の情話を傾け罄すは格氏が無上の樂なりき。氏が孝友の情已に斯の如くんば千八百二十五年忽然慈母に別れたるが如き、氏をして風樹の歎あらしめたるもの夫れ果して如何ぞや

商館の境遇

是より先き氏が叔父の商館に入るや、其境遇の困難なる殆んど學校に讓らず。叔父叔母は格氏が朝早く寢室に於て佛語を學ぶを咎め、氏が書籍を愛讀するは他日事業家となるの大碍礙なりとし、親切の口實を以

巡廻役となる

て其一擧一動を束縛したれば、流石の格氏も堪へかねて、他の商館に移らんとし父の肯んぜざりし爲僅かに思ひ止まりしが、是れ一旦の事にして、氏が誠實、勤勉、才能は終に叔父及ひ他の株主の愛顧を來し、母を喪へるの年を以て筆生より巡廻役に昇進せり。於是氏は欣然麻紗金巾の見本及會計收入簿を收めたる囊袋を肩にして、勘定を集め注文を促しつゝマンチエストルボルミンハムの都邑を始め愛蘭地方までも遍歴せり。隘陋なる樊籠を厭ふて、常に廣濶の青空を愛し、書卷の死自然教育

智に滿足せずして粗礪なる世路の砥上に活見を磨かんと欲する格氏に取ては是れ實に千金の賜にまさるの思ありしなるべし。素より其往來の車上に於て見る所、旅館の夕に聞く所は、實に瑣々たるものゝみ。其接する所は、僅かに商廛の主管手代等に過ぎず。然れども慧敏なる氏が耳目は一視一聽の際にも無數の材料を吸收して深く胷底に藏むるを

舊商館廢して新商館に移る

怠らず。要するに此自然教育がヨルクシヤイル在校の五年間にまして其心性を開發したること明白なりとす。

千八百二十六年格氏は商館の破産により暫く父の許に歸り居りしが、舊雇主の一人パルトリッヂなる者深く格氏の才器を愛し、再び其新商會に雇ひ入れたり。是より氏はまた更紗木綿の袋を携へて得意先を巡歴すること二年。千八百二十八年終に商館の關係を解き、二人の朋友と共に新に事業を興せり。格氏後當時の事情を述べて曰く

自事業を始む

事業經始の摸樣

余が二年の壯年と共に事業を始めたり。我等は僅に千磅の金を集め得たるのみ、しかも過半は他より借り入れたるものなりき。斯くて我等は共に車に上りて倫敦を發し、僅に二十時間にしてマンチエストルに着し……直ちにフヲルト會社に行き、何事も隱さず正直に打明けたり。而して我等の品行と事務の熟練を除くの外更に一個の保險

抵當なきに拘はらず、千八百三十年より二年足らずの間に於て、彼等がワットリング街なる我等の店へ送り越したる物貨の價は、無慮四万磅に上れり。後余は彼等と語る毎に「一人宛二百磅の資金をも有せずと自白したる者等をば如何にして斯くは信任せられしや」と訝れば、彼等ハ答へて曰ふ、我等は資本ありて才德なき輩を信任せず、假令些少の資本を有せずとも品行端正にして技倆あり商賣の事に明るき壯年をば信任するなりと。

商賣繁昌す

格氏の力量品行はフヲルト會社の信用を受け、物貨は無抵當にて續々送り來れば、商賣は日一日より盛大に赴き、且千八百三十一年に於ては久しく貿易の發達を障礙し居たる重稅の撤去せられたるに乘じて、格氏等は仲買の業を止め、倫敦商店の外更にマンチエストルに程遠からぬサブデンの一工場をフヲルト會社より讓り受け、盛に更紗印摺の事

一家の困難

業を行へり。

如斯く格氏が一身次第に上り行くに引易ゑ、其家族は流離慘憺家より家に萍轉し、格氏が金を擲ち心を竭して扶助せるを幾回なるを知らすと雖も、其苦心は盡く爐上の雪と消へ去りて一も其痕を止めず。父は素是れ優柔不斷の人物なれば亦如何ともすべからざるも、一家負擔の任に當るべき嫡兄フレデリッキすら柔弱なる父の性質を承け嗣ぎ、幾度となく事業を始めては失敗し、失敗しては憂愁の深きに陷ること數々なれば、之を慰め勵す格氏が苦心は實に一方ならざりき。左に掲ぐるは氏が其兄に寄せたる書翰の一なり。

嫡兄フレデリッキ

其兄を勵す

余は吾胸中に溢るゝばかりなるボナパルト的感情、即設令如何なる障礙の我進路を遮るも滿身の氣力を擧て之に衝れば必ず克ちおうすべしとの確信を以て自ら己が身に刺輪を加ふる其感情を聊御身

に分ちたく存ずるなり。御身若し前回對面の折に宣ひし如き失望的の考を有し玉はゞ事皆休すと云ふべし。夫れ厚運孃は他の美人と同しく大膽活潑の求婚者を愛するものなり。されば御身が自家の利害に關する事を計り玉ふ時には願くは今までよりも更に調子を引上げ玉はんをを。殊に御身の執り玉ふ事正經ならんには、決して一歩も人に讓らず人に依頼せずまた無頓着となり玉はざるを望む。然れども此等は皆宜しく内より出で來らざるべからざるものにて、要するに氣力發達の結果に外ならざれば、余は今贅辨を用ひず、只御身が此精神氣力を培養し玉はんをを切願す。

時に憂愁の雲に蔽はる

剛毅快活、如何なる黑闇の中にも決して希望の光を失はざるを格氏の如きも、過重の憂を負はせられたるが爲め、時には雲霧の覆ひ來るを免れざりしと見へ、其兄に寄せたる書中に左の一節あり。

昨日はまた憐なるm(氏の姉妹)より一通の悲しき書狀來れり。吁余が一生の苦難中此一部分のみは實に二度と經過するの勇氣あらざるなり。然り余は將來の希望の中に過去の苦を葬り了らむ。然れども余が將來はまた焉んぞ過去の如くあらざるを知らんや。余は然あるべしと思ふ時あるなり。余は包まず御身に告ぐ、折に觸れては余が氣力も全く消燼し去ることあり。余は他の帮助を要するなり。然れば御身は宜しく奮起し玉ふべし、精神を――精神を――精神を。

然れども氏が友愛の情は一家の困難を坐視するに忍びず。マンチエストルに移るに及んでフレデリツキを招きて其家に寓せしめ「此より後總て余が身上に落ち來る厚運は、御身も此に與かるの權ありと思惟し玉へ」と慰めて其財囊を共にし、千八百三十三年其父を喪へる後は、恰も孤雛の相倚るが如く友愛の情一層其深きを加へたり。

見るべし、一家の爲めに一身を擲ち一國の爲に一家を捧ぐる氏が献身の運命は已に徽光を一生の曉に發したるを。

第二章　進歩の時期

初めて心を公事に注ぐ

格氏が更紗印摺の工場をサブデンに設くるや、邑中已に六百餘の工人を有すれとも、一の教會もなく學校もなく之が爲めにいたく風儀の墮落せるを悲み「世には其働くべき道を知らざるが爲、好良の人物にして、終に無用に終るもの多し」と慨嘆し、即ち演説をなし書翰を發して地方有志者を促し、教育を施行せんをを計畫したり。是れ即ち氏が一身一家

此五六年間は格氏が著しき進歩を爲せるの時期

心智開發の事

の外にして始めて心を公衆の事に注ぎたるの端緒にして、一個生計的の商人より公民的人物に進化したるは則此五六年間にありとす。第一に氏を刺衝したるものは心智開發の一事なり。千八百三十二年新に工場を興さんとして寸刻の時間は千金も啻ならざりし紛擾匆忙の間に於て、氏は其兄に書を寄せて曰く、

或儕は此冬期に少しく數學を學ぶべきなり。余はまた少しく羅甸を知らんと欲す。若干の書籍を手に入れなば六ヶ月にて十分ならん。余はヘンリー(其弟)が此冬の間に西班牙語を學ばんをを望む。貿易上の言語としては西語最必要なり。

書を讀み文を學ぶ

此より氏は暇なき暇を偸んでセルヴァンティズ、スペンサー、バイロン、ボルク、アダム、スミスを初め有名なる作家の著述幷に歐洲歴史に眼を曝し、傍ら筆を取て文章を獨習せり。蓋し文筆の業は氏が少壯より深く嗜

戯曲を作りて演劇の頭取に拒絶せらる

好せる處にして、猶倫敦にありし頃、氏は「骨相家」と題する拙惡なる戯曲を作り、之をコヴエントガーデン坐の頭取に示してスゲなく拒絶せられたることあり。後格氏は述懷して曰く、

此れ實に幸なる事なりしなり。彼若し之を領收したらむには、余は一生無賴漢にて終りしならん。

旅行

此外また一篇の滑稽戯曲を綴りたるをありしが、今や斯る風雲月露の閑文字をすてゝ專ら實用の文を綴ることを務めたり。また千八百三十三年よは巴里に赴き、其翌年は佛國より瑞西に旅行して以て見聞を廣め、千八百三十五年始めて筆を政治壇上に揮て、マンチエストル新聞紙上に市籍編入の問題を論じ、且「英蘭愛蘭及亞米利加」と題する小冊子を著述したり。

小冊子、一英國の形勢

此時に當り英國は十八世紀の下半よりして醞釀し來れる改革の氣運

小冊子の大意

滔々千里の勢を以て舊習故弊を掃蕩し去り、政界にハ新分子相繼で起り來り、オーコンネルは愛蘭獨立を大呼して在朝政治家の膽を喝破し、宗教界にはトマス、カーライル椽大の筆を揮て一世を搖撼し、其他新奇の發明をなして商工社會の面目を一新し以て改革の氣運を鞭つ者踵を接し、英國を擧げて殆んど波湧き渦旋るの勢あり。格氏が小冊子の如きもまた此の風雲に養成せられたる一兒子也。氏ハ此時に乘じて內外の政界に一大改革を行ふにあらずんば、英國をして此氣運に伴はしむる能はずと斷信し、即ち爰に其筆を取て其稿を起せしなり。開卷第一に於て氏は先づ國力平均說の妄を論じ、更に進んで英國政治上の大禍害は即ち其外交主義にあり、外交の弊害は英國が常に他邦の紛紜に干涉し、無益の葛藤を開き、無益の財を消費し、無益の生命を屠戮し、許多の損害を

小冊子の文脉

招き出すにありと痛論し、轉じて愛蘭の問題に移りて、英國政治家が愛蘭を輕忽に付するを駁し、愛蘭紛紜ハ罪英國にあり、愛蘭ヨ國教會を設くるは尤も不當の所爲なりと切論し、說て亞米利加の條下に至て、双々英米の情態を比較し、英國貿易の大敵は米國なり、英國貿易の大碍礙は保護限禁の制法にありと論じ、筆鋒延て穀物條例の弊害に及び以て其論を結ぶ。一百餘頁の小冊子と雖とも、議論の切實にして眼光の大局にわたれる、一讀以て氏が終生把持せる外交、貿易上の意見は大綱已に此時に定まり居りしを見るべく、若夫れ其文章の明快透徹、引證自在、着々肯綮に中るに至りては、以て專門文士の賛稱を博ふするに足る。之を彼農家に生れて完全なる教育を受けず、筆生となり、巡回商人となり、僻隅の一商賈となりたる三十歳の壯年が、物貨を賣り、損得を算へ、更紗の紋形を案じ、日々の業務に逐はるゝの暇、深夜燈下に一氣呵成したるもの

米國旅行

と思へば、氏が人物の進步亦實に驚くべきものあり。

此年五月氏米國に旅行し、新英蘭諸州を歷遊し、貿易政治の情態を觀察すると一ヶ月餘にして英國に歸り、家業を擴張する傍ら、マンチエストルを市籍に編入する事に盡力せり。氏が初めて公衆の前に演說したるは即此際の事にして、傍聽者の一人が

初演說

彼は連りに辭讓したれども、諸人の勸により餘儀なく立上れり。然るに彼は前後を錯亂し狼狽し激昂して終に其席に倒れ坐し、會長は爲めに聽衆に謝せり。

小冊子、二

と記せるを見れば、氏が演說の甚だ未熟なりしを知るに足れり。然れども舌鋒の未熟なるに引易へて其筆鋒はます〳〵鋭く、先著の小冊子の頗る好評を得て速に第五版に上りたる勢に乘じ、千八百三十六年の夏更に「露西亞」てふ一冊子を著述せり。此れ曩に「英蘭、愛蘭、及亞米利加」の冊

子に於て記述したる其主義を縯繹して、露西亞、土耳其、波蘭土の諸邦と英國との關係に論及したるものの也。文中英國過去の經驗に徵して將來の外國干涉を戒め、ウヲシントン、アーヴィングが「英人は恰も俠客の如し。隣人の喧嘩を見れば、直ちに棍棒を引提げて其中に立入り、鞭韃を以て隣人の福祉を增進せんとするものなり」と諷刺せる言などに照して、英國が常に兵力を以て外邦の紛紜に立入るを論駁したるを見れば、氏が中立平和の主義は愈確然として立ちしこと明白なりとす。此歲十月氏は身躰の保養をかねて埃及地方を遊歷し、尋で歐洲外交世界紛紜の源と稱せらるゝ土耳其に渡りて其形勢を觀察し、まず〳〵英國の得策は中立にあるを曉れり。

旅行

ヴヰクトリア女皇の即位

千八百三十六年六月英皇ウヰリアム第四世崩じ、ヴヰクトリア皇女寶祚を踐み、尋て全國議員改撰の事あり。是より先き格氏は夙に心を政治に傾け、國會に入りて盡す處あらんと欲せしか、優柔なるフレデリッキは大に之を諫め、小册子著述の事すら之を止めしめんとなしたり。然れども有爲の格氏は肯んぜず。外國に旅行せる折偶故鄕の朋友より「本國の事に心を煩すなかれ」と書き送りければ、氏答へ書して曰く、

國會に入らんと欲す

ストックポルト撰擧人の事に就ては余は少しも心を煩はさず。尊貴なる撰擧人諸氏は其好むがまゝに爲して可なり、渠曹は余をエム、ピー(議員)となすも可なり。假令なさずともそは少しも余が幸福を害することなかるべし。余をして結果如何を心配せしむるものは余が懷抱せる主義なり。足下のよく知れる如く、一身上よりすれば今二年間は寧自由(案するに國會に入るを欲せざるの意)にあらんことを望む。

撰擧敗北(19)

然れとも已に撰擧の時期となりては、氏も亦自づから撰擧熱に催ふされ、改進派の候補者としてストックポルトを爭ひしが、開票の當日とな

是れ却て幸なり

富家の翁と老ゆるを願はず

れば、氏が得點は最も下にありき。

撰擧已に敗北せり、然れども是れ却て格氏の幸なりき。蓋し氏か家業は今や大に榮へ、年々の利潤二万磅に上る程にして、且亦氏は己が爲兄弟の爲終には倫敦の商店と分離せむと計畫し居たる折柄なれば、此難局を了し此基礎を確定するまでは格氏の一身暫くも監督の坐を離るべからざりしが故なり。然れども綿巾帳簿の間に朽死するは素より氏が志にあらざる也。氏が其兄に予へし書中に云ふあり。

此分離一件の好結果を來さむ爲め、今より數年間余は全力を盡すべし。然れども之と同時に身を事務の係累より脱するとに注意すべし。今より五年間にはヘンリー、チャールス等(其弟二)の地位も定まり、此追放希望者なる余を萬事の係累より逐ひ出すに至らんとを期望するなり。何れにもせよ我曹をして「有要の生涯を送るは徒らに長生するよりも遙に優れる」を記憶せしめよ。且我曹をして私吝の輩の決して有する能はざる滿足即金錢貯蓄の事のみに一生を煩はさずして幾分の時間は之を更に高尚貴重なる働に用ふると云ふ其滿足を失ふとなからしめよ。

ブライト氏に會す旅行

マンチエストルの助役となる

格氏が家業をフレデリッキ兄弟に讓りて、專ら公務に從事せんと決心したるを以て知るべし。

是より氏ハ其兄弟の爲め事務を整理するの暇、或は自治制の事に盡力し、或は教育の爲めに奔走して初めてジョン、ブライト氏に邂逅し、或は日耳曼に旅行して經濟上の形勢を觀察し、又千八百三十八年マンチエストルが愈市籍の免許を得るに及んで、氏ハ平生此事に盡力したるの廉を以て同市の助役に擧げられ、リチヤード、コブデンの名はやゝマンチエストル人士の口に上るに到れり。

此より先き英國は荒年頻りに打續きて非道の穀法中下の社會を苦しめ、一方には券狀黨愈激烈の運動を逞ふして人心恟々たり。格氏が之に對するの心情は果して如何。左の一翰を見て之を知るべし。

「余は急進派の激動に就き少しも驚くべき事あるを見ず、また之が爲に自由主義の運命を危ぶむことあらず。曩きに諸事豊福なりし爲め若しくは一見豊福の觀ありし爲諸人皆保守黨となり了りし彼三年間の昏睡に比すれば、此却て彼に優ると云ふべきなり。御身は急進派の失錯の爲痛く政治上の事を忌み玉ふが如し。然れども余に於てはしかく感ぜざるなり。渠曹は素より粗暴なり、傲慢なり、また愚昧なることもあらん。然れども要路の黨與は更に惡しきにあらずや。專偏特庇の主義を以て上に立つ黨派と、設令盲目的にせよ多數人民の公益を求むるの人民と、我曹は果して其孰れを擇むべきか。渠曹若し錯誤あるらんか、我等宜しく正すべし。果して亂暴ならんか、須らく調和を務むべし。決して決して船の全躰(政治全躰)を放拋する如き言をば發すべからず。

余は思ふ斯く散亂せる分子も穀法問題によりて相集合することあるべし。余が見る所を以てすれば、彼問題には道義的否宗教的精神をも注入するを得べし。而して若し奴隷廢止の運動に倣ふて以て穀法廢止の運動を行はゞ、夫れ遂に禦ぐべからざるものあらん。

斯くて英國の狀態は惡(バッド)より猶惡(ウオルス)に移り、穀法は一國の富源を壅蔽し、細民荒村に飢に叫び、建て連ねたるランキアシアの大工場は器械の響日々に細ふなりぬ。眼に見、耳に聞く、一として改革者を促すものにあらざるなし。格氏焉んぞ默然坐視するを得んや。於是かマンチエストルの金巾商は一方の衝にも當らんと袂を揮て穀法排擊の戰場に立出たり。時に

千八百三十八年十月の半なりき。

英國商業世界の沿革

アダム、スミスの富國論

第三章　自由貿易　其一

今格氏が一生の精彩たり英國近世史上の中心點たる穀法廢止の一段を叙するに當て、先英國商業世界が第十八世紀の初よりして一轉一折以て無數の波瀾を翻し、終に穀法排擊の懸崖に渦まき來るの沿革を畧叙せざるべからず。

第十八世紀の半に當りアダム、スミスの富國論を著すや、覺へず一聲の長嘆を漏して曰く、自由貿易の全く英國に行はれんとを望むは、恰も黄金世界（ヒア、オーショナ）の建たんとを望むと一般なりと。若し氏をして更に六十年後の英國に生れしめば、其所謂ユトピアの現に眼前に歴々たるを驚けるなるべし。斯の如く變轉を來したる所以のものは何ぞや。

十八世紀の英國商業世界

蓋し彼大經濟家が富國論を著はせるの時に當てや、英國は年々豊作打續き、千七百年より同六十三年に至るまで、小麥の價格の五十志（シルリング）に上れるを僅々六度に過ぎざる程なりければ、處々の倉廩穀禾溢れ、また一國のよく消費し得べきにあらず。是を以て穀物の價格を維持せんが爲には、自然其輸出を計らざるを得ず。已に輸出を計る以上は、彼れの物品を購ふて我穀物を賣るの道を求むること是れ必然の理にして、地主農民の頑固なるも不知不識自由貿易の味方とはなりしなり。商工社會は則ち然らず。渠曹は只管内國市場を一手に占有せんと欲して、また外國の

農利黨

商工社會

十八世紀の下半より十九世紀の上半に到て英國商業世界の情態一變す

農利黨

市場に競爭するを知らず。我福祉を維持すべきものは保護制法の外にあらずと迷信し、必死の力を以て之に執着せるの有樣は、猶彼北米聯邦に於て、西南諸州の農業家産綿者ハ盡く自由貿易を主張するに引易へ、東北新英諸州の商賈製造家は却て極端の保護黨たると一般にして、自由貿易の一語は實に夢想にだも過ぎざりき。是れアダム、スミスの歎聲を發したる所以なり。

然るに十八世紀の下半よりして、英國は旱魃水害引續き打續きて收穫次第に乏しく、千七百六十九年より千八百四十六年に至るまで、穀價の五十志（シルリング）に下ること僅々十三度よ過ぎざりし程なれば、外國輸出は愚か、今は外國穀物の輸入を防がざるべからざる時となり、農利の一派は今や自由貿易の假面を脱して爰に純然たる保護黨となり、恰も曩きに商工社會が保護制法に依賴したると同樣の熱心を以て穀法に執着し、之

を以て穀物賣却の權利を吾一手に握らんと試みたり。然り而して商工社會の情態は全く之と相反し、十八世紀の末より十九世紀の上半にかけて新奇の發明をなす者、曰くワットなり、曰くステヴンソンなり、曰くアークライトなり、曰くカートライトなり、發見發見を促し發明發明を生じ、頓に商工世界の面目を一新し、嚴爾たる英國を以て天下の市場に競爭して毫も後れを取らざるの製造國とはならしめたり。於是乎渠輩は忽ち十八世紀の農夫と同感を生じ來り、獨り內國の市場に籠城するを以て足れりとせず、進んで利を外國の市場にも爭はんと欲するの氣象を生じ、何時しか茲に自由貿易の麾下に立つの一隊と豹變せり。

如斯く時勢の推移は忽ちにして商業世界の舞臺を一轉し、商工社會は其發明の利器を以て勝を千里の外に爭はんと欲するに當りてや、啻に輸出の道の開けんとを望むのみならず、また輸入の道の開けんとを望

無數の障礙
穀法は最大障礙

まざるを得ず。何となれば我よく買ふが故に彼よく買ふは是れ尤も自然の理にして、輸入の道を杜絶ぐは即ち輸出の道を塞ぐものなればなり。而して彼等は今無數の障礙の其路に横はれるを發見せり。其萬殊の限制中最も大なる障礙は何ぞ。穀法即是なり。夫れ尤もよく穀物を產するの國は、製造國が尤も其得意を有するの國にして、我れよく彼れの食物を買ふを得ば、彼れ必らず我製造物を買ふ、是れ必然の勢なり。然して穀法は全く其途を杜絶せり。豈にたゞ是のみならんや、穀法は外國の競爭を挑發せり。穀法は多數工人を集むるの道を塞ぎたり、一弊一害指を屈して數へ來れゝ、英國を毒するの禍原は實にたゞ此穀法の二字に籠れり。たゞ此二字即ち一國進歩の當面に一大關門を築き成せり。夫れ自由貿易にあらずんば以て商業世界の繁榮を來す能はず、穀法の關門を破らずんば以て自由貿易を決行すべからず。是れ自由貿易が第一に穀

法排擊の名を以て現はれ來れる所以なり。

然り而して彼穀法は啻にランキアシャイル大工場の機械囂々の音を中絶せしめたるのみならず、亦幾多茅屋の竈火を消燼せり。前世紀中は五十志(シルリング)を越すを稀なりし穀物の價も、今や七十志(シルリング)より八十志(シルリング)の間を往來し、馬玲薯は霖雨に腐爛して惟一の生命の蔓を斷去り、薊を煮、腐敗したる死牛の屍を掘り來りて之を食ひ、一週の間に一百箇の婚禮指環を賣るの村あり、五戸の一戸は空屋となるの市町あり、一郡二萬五千人盡く其職業を失ふて途方に暮るゝ者あるに到ては、是れ實に坐視すべからず。永遠の爲に計るも、目前の急よりするも、經濟利害の上よりするも、德義の點より考ふるも、今や穀法廢止は實に已むべからず。

穀法の廢止は今や實に已むべからず。於是千八百三十六年ジョセフ、ヒュム、モールスウヲルス等國會に於て急進席を占むる三五の輩、非穀法

非穀法教會倫敦に組織せらる

此の大運動は倫敦に起らずして僻陬に起れり

千八百三十八年マンチエストル非穀法新協會

協會を倫敦に組織し、以て改革の衝に當らんと企てしか、事終に捗取らず、空しく烟消霧散の憾を遺したり。蓋し倫敦に於ては萬殊千樣の變動朝に夕に市民の心を刺衝し來るを以て、其心を一點に傾瀉せしむる能はず、強大なる組織と、一徹の精神とを以て、一個の目的を成就すべきの團結は僻陬遠隔の地方より起り來らざるを得ざるなり。

千八百三十八年十月マンチエストル一旅館の階上に、一脚のテーブルを圍んで相話する七人の紳士あり。熟談の末終にマンチエストル非穀法新協會なるものを組織したり。他日滔天の瀾を翻へして舊習の塹壘を一掃し去りたる非穀法大同盟の潮流は實に此涓々の一滴にぞ始まりける。協會はリチヤード、コブデン氏を始めとして續々贊成者を得、見る〳〵一大團と化成したれば「余輩をして財産の全沒を救はんが爲、速かに其一部を投ぜしめよ」との格氏の發議に從て、一ヶ月の間に先づ六

千八百三十九年

三十六ケ都府請願書を國會に捧ぐ

請願拒絶せられ動議排棄せらる

千磅の運動費を募り、千八百三十九年の初めには一切の準備已に整ひて、趣旨を世に公布し、運動の主腦たるべき委員若干名を撰定し、格氏もまた其一人に撰まれたり。

此時に當り非穀法の氣運次第に燃立ち、協會を組織するもの續々相接し、愈三月の半に至り三十六ケ都府の名代人は五十餘万人の姓名を連署したる請願書を捧げて國會に到り、外庭に待つこと數日、此時國會には非穀法派の勇將チヤールス、ウ井リアルズ氏正さに「調査委員を設けて外國穀物輸入の制限を驗査せしむる」の動議を提出し、請願者皆議場の外に在て結果如何にと待ち居りしに、程なく聞へ來りし一報は、請願は拒絶せられウィリアルズの動議は殆んど三倍の多數を以て否決せられたるてふ凶報なりき。於是名代人中、事の容易ならざるを見て望を失する者ありしかは、格氏、即ち之を勵まし、國會假令我敵となるとも三百

格氏名代人等を勵す

萬の人民は現に我味方なるを想ひ起さしめ、英國各都府の聯合を以て日耳曼ハンス諸都府の同盟に比し恰も彼同盟がライン、ダニューブ、エルブ河畔の山頂に聳へ立たる封建君主の城砦をば、盡く粉碎してまた餘礁を遺さゞりしか如く、此新同盟もまた英國封建虐主(地主等)の立籠れる制法(穀法)の根據を攻陷すの日あるべきを預言し、愈此時を以て個々分離せる各協會を團結して一の大同盟となすべきをを勸告したるに、忽ち諸名代人の贊成を得、マンチエストル非穀法新協會は、茲に變じて、非穀法大同盟となり、萬端の事務を整頓するが爲め、中央部をマンチエストルに設け、新協會の委員は其まゝに移て大同盟の本部委員となり、指揮號令の大任は早くも格氏等の手中に歸せり。

非穀法大同盟成る

同盟の働

大同盟の組織已に成就したれば、本部委員の計畫により、或は非穀法派の代議士を招待して盛に演說を催ふし、或は非穀法新報てふ機關新聞

穀法排擊は容易の擧にあらず

を興して大に人心を刺衝し、また講談者を八方に派出して穀法の害を說かしむるを、千八百三十九年より同四十年の際にかけて暫らくも間斷なし。然して遊說員が一々返り來りて報道する所は、穀法廢止の決して容易ならざるを表證せり。蘇格蘭に於ては遊說員も可なりの接待を受たれども、英國の反對は殆んど豫想の外に出で、例せばアロンゼルに於ては、市長會館の貸渡を拒み、地主農夫は講談者を河中に投入るゝ者には小麥二斗を予ふべしと宣言し、ビートルスフヒールドに於ては、旅館の主婦に追拂はれて遊說者は終に眠るの家なく、ラウスに於ては、治安妨害の廉を以て罰金を課せられニウフヲルク等に於ては、亂民道に要していたく亡狀を働きたるに、地方新聞は大に之を稱贊し、其亂民を指して善良なる政府の朋友、國家の宗敎を維持する有志者と云へり。舊弊故惡の斃れ難きや、實に如斯。改革者の汗血を絞るの後にあらずんば、

千八百四十年政府の情狀如何

渠等は容易に死せざるなり。

如斯一世の風潮ます〳〵急ならむとするの時に當り、統轄の難局に當れる政府の情態は、殆んど孤城落日の有樣なり。千八百三十二年議院改革を成就したる改進黨の氣勢は次第に消竭し陵夷して、殆んど十一年間內閣に坐したるはたゞ名のみ、幾度か議院に失敗するも猶政權に戀々として勇退せざるが爲めに、信用已に地に墮ち、加ふるに國庫次第に缺乏し、千八百四十一年に至りては已に二百五十萬磅の缺乏を告げ、保守黨首領ロボルトピール氏が「余は彼の空虛なる金匣の上に坐し、底もなき缺乏の緣邊によりて、歲計豫算表を釣らんとする大藏大臣より憐れなる者を見ず」と評せる如く、事また爲すべからざるに至れり。於是政府は急に方向を一變し、砂糖、材木等の稅を減じ、從來の穀法を革めて八志(シルリング)の定稅を課する等の事を國會に持出せしが、變化の餘りに急なりしが爲、其胷中は瞭然と見透かされ、保護黨は固より、商工社會の代表者すら快く之を賛せず、終にピールの爲めに信任欠乏の動議を起されて敗北し、更に此年八月を以て全國撰擧に訴へたるも、敵黨の爲めに大多數を制せられて終に辭職し、保守黨入りて內閣を嗣ぐ。而して格氏は此時を以てストックポルトの撰擧區より撰まれて初めて國會に入れり。

保守黨內閣に入る

格氏國會に入る

第四章　自由貿易　第二

千八百四十一年の國會に於ては、保守黨九十餘の大多數を占め、其主領

にハ練達の人物として名望赫々たるロボルト、ピール氏を戴き、其内閣には曩きに改進黨を脱せるサー、ゼー・ムス、グラハムを始めとし歴々の人物席を占め、勢方に旭日の昇るが如く、昇降法(スライディング、スケール)(即ち在來の穀法にして、外國穀物の輸入税は内國の穀價に反比例するの制法なり。是れ啻に農利を特庇するのみならず、却て農利の害となるの制法なりき。)の本城は堅牢巖の如く、如何なる砲烟彈雨の攻撃も到底攻陷し難しとぞ見るたりける。保守黨の勢如斯なるに引易へ、悄然反對席によれるは改進黨の一派なり。素より其首領たるジョン、ラッセル卿は決してピールに劣るの人物ならず、パルメルストーン、マッコレーの諸名士また其隊伍に列したるも、渠曹は方に是れ敗軍の將、保守黨は全國撰擧に五十三萬餘票の夥しきを制し得たるに、渠曹は僅々二十七萬三千票を得たるに過ぎず。左れば渠曹が昇降法を欲せず、また穀法全廢の極に走るを欲せず、極端論者の稱を蒙らずして自由貿易家の名を維持せんと欲し、茲に其中間を撰

改進黨

んで立てる定額税(格氏も始めは定税を以て較昇降法に優るものとしたれども、幾もなく其說を一變し、定税は即ち一部を予へて全鉢を殘すものにして、定税即定弊なりと論ぜり。)の堡塞は誠に頼少なき有樣なりき。反對席の一隅に其席を占めたるは是れ自由貿易派の一團躰なり。渠曹ハ撰擧の時に於てストックポルト、ブライトン等二三の都府を得たれども、勢力尤も微弱にして以て改進派の刺輪となるに足らず、況んや保守黨の大多數に當るを難く、凱歌の望は杳々として尙遙に見ゑたりき。是千八百四十一年の國會に於ける諸黨派の光景なり。

國會の外に於ける穀法戰爭の陣立を一瞥せむ。穀法の辨護者自由貿易派の當の敵として正面に立つ者は地主、農夫の一隊なり。渠曹は穀法を以て已が最後の城郭とし、自由貿易派と已等とは水火相容れざるの仇敵となせり。其右軍に列する者は劣狀黨の一隊なり。渠曹は敢て穀法を是とするにあらず、然れども其の政治の改革を先にすると、穀價の下落

僧侶國教徒

新聞紙

より生ずる結果は却て貨銀を下落し、平民社會を疚しむるものと臆想するよりして、其初に當ては尤も劇烈の抵抗を試みたり。左翼に陣する者は即ち特權特許の保庇者と呼ばれたる僧侶國教徒の一隊なり。而して此三者の外に於て、常に其遊軍となりて誣毀訐讒、冷笑熱罵、以て自由貿易派の一隊を惱したるものは、全國の新聞紙にして、殊にタイムス新聞が縱横に翻弄し來る一枝の筆なりとす。改革の、新に、唱へらるゝに、當ては、必らず正反對に立ち、變革已に避くべからざるの場合となりては、漸次に、說を變へて何時しか其中に混入し、已に全く成就せらるゝに及んでは、稱贊賞譽また以前の反對を知らざるが如くするは、是れタイムスノ常政略なれば、曩きにはメルボルン內閣と共に盛に定稅を主張し、已に政府の勢の傾くを見るに及んでは、脫兎の如く筆鋒を一轉しピール內閣を援けて、茲に極端なる昇降說を主張せり。斯の大敵を前に引受

北方諸都府の商工社會

諸名士の謬見

け、斷々として自由貿易の麾下に立てる者は、北方諸都府（ランキアシヤイルヨルクシヤル、等）の商工社會と非國敎徒の一隊なり。前者は直接の關係よりして自由貿易の味方となり、後者は干涉專偏に反對するよりして共に其の麾下に立てり。見るべし、穀法排擊の事は決して狹隘なる範圍の競爭にあらず。之を經濟上よりすれば自由貿易と保護貿易とは即ち此戰場に勝敗を競ひたり。之を社會上よりすれば、貴族と平民とは起仆倒立を此戰場に爭ひたり。概括すれば封建分子と進步の分子、即ち新英國と舊英國との戰爭は、齊しく穀法排擊の一點に渦まき來れり。

大凡そ多年社會の纖維內に浸染せる舊習か、一朝改革の氣運に會する時に於ては、之が爲に心惑ひ神眩し往々にして後人の笑を招くもの、啻に癡呆の群兒に止まらず、錚々の名士もまた其針路を謬らざるもの殆んど稀なり。之を以てメルボルン卿は「穀法の全廢を唱ふる者は狂人な

り」と云ひ、穀法一部分の改革を主唱せる一貴顯は、同盟黨の穀法全廢說を聞て「卿等其目的を成就せば王國は顚覆すべし」と云ひ、サー、ゼームス、グラハムは「穀法を全廢せば、可憐の農夫は清麗なる花園小舍の中を去りて喧噪たる製造場に入らざるを得ざるべし。謂ふをなかれ、波蘭人民を西比利亞の寒原に移すは慘刻の事なりと。我議院の或る人々が今計畫せる處は更に慘刻なるものなり」と宣言し、ウエリントン公は「穀法を早計にも廢止するあらば、農業は必らず衰ふべし。然らば英國は世界の市場たる能はざらん」と云ひ、事理に明らかに進步の朋友を以て自ら期するマッコレーの如きすらエディンボロー府の人民が純然たる自由貿易說を主張するを諫めて、少しく寛にすべしと云へり。是れ以て一般の輿論を卜するに足るべき也。されば、同盟軍の一隊が其目的を成就する前には、國會に於ける保守黨を論破し、改進黨を提起し、國會の外に於

初めて國會に演說す

ては、農利黨を破り、劵狀黨を破り、僧侶貴族の陣を覆し、タイムスの口を噤し、幷に諸名士の謬見を一變せしめざるを得ざるなり。

格氏已に國會に入りたるの月、保守黨が穀法問題を遷延し去らんとするの摸樣を見て、初めて口を議院に開き「今議院に向て救濟を促し叫ぶの聲は、一階級の利害にあらず、經濟學者の空論にあらず、目下危急の情態實に之れを促すものなれば、万の問題を差措きて、先此事を處置せざるべからず」と論じ、また貴縉の家は百磅の歲入に付僅に半片（ペンニー）の麵包稅を納むるに過ぎざれども、勞役者の家庭に課する稅額は殆んど二割に下らざるの例を擧げて、穀法の惡果を論斷せり。其演說の結句に曰く、

余は自ら改進黨とも亦保守黨とも稱せざるべし。余は自由貿易者なり、常に自ら斯く唱ふべし。余は改進黨が保護論者の列を脫して已に我方位に向て四分の三を進み來れるの德を承認す。然れども若し反

テームスの譬諭

對席に座する貴紳(ビール)にして、尙一歩を進まれなば、余は之を中途に迎へて共に握手するの第一人たるべき也。

以て氏が保守黨の入閣の爲めに失望せず、ビールを見ること寧ろラッセル卿にまされるを知るに足るべし。幾もなく、また穀法の弊害を論じて曰く、

今英米二國の間に横はれる太西洋をば假りにテームス河と見做し、一方の人民は工匠、製造者にして多額の物品を製出し、他方の人民は農業者にして穀物豕肉牛肉等自國にて消費し盡さゝる程の多量を産すると假定せよ。而して今此双方の人民が互に其産出品を交易せんと切望するの時に當りて、一大惡鬼(そは斯る地位にありて斯る事をなすものは余其の人間界のものたるを知らざたば)躍然として河の中央より顯はれ出で、手に國會の條例を握りもちて、爾曹決して相

格氏の演說國會を驚かす

自由貿易家に雄辨家なし

互の需用を供給するを許さず」と云ひ、加之此惡鬼は微笑を粧ひつゝ憐れなる犧牲等に向ひて「此は爾曹の爲なり、我れたゞ爾曹を保護せんが爲めに之を爲すなり」と云はゞ如何。テームス河と太西洋とまた何の異なる處あらんや。

格氏が演說は以て國會を驚かせり。渠曹は今や言を飾らず辭を衒はず只事實と論理により諄々して推し來る一種斬新の舌鋒の敵軍に現はれ出たるを認め、心ある輩は皆其尋常の敵にあらざるを恐れたり。然れともサイデンハム卿が曾てピットの時より今日に至る迄自由貿易家には終に一人の雄辨家なし。我儕は事實と數字と理窟を以て攻擊し去れども其問題を一層の高きに提昂し以て人民の感情を發揮する能ハず」と慨嘆したる如く、同盟人物に乏しからず、格氏討論に拙なからざるも、高朗の音、俊越の辨、以て人心を聳動ずべき一流の雄辨家を缺けるの

ジョンブライト氏を戰場に招き出す

時に際し、此年九月格氏は同盟軍の爲めにランキアシャイルの一平民ジョン、ブライト氏を涙の中より戰場に誘ひ出せり。此時よりして二十幾年英國政界には二星双々相連つて黑闇を照せり。

千八百四十二年

千八百四十一年の末より同四十二年の始めにかけて、政府が穀法を改革せんとするの風聞早くも北方諸都府に聞こゑければ、同盟黨は指を屈して其時を待ちしに、愈ピール氏が改革案を提出するに及んで之を聞けば、氏ハ目下窮厄の原因を穀法に歸せざれども然も在來の穀法には改革すべき點ありとし、從前の昇降法（穀價七十志＝輸入稅十志八片。穀價五十志＝輸入稅三十六志。八片）を革めて新法（穀價七十志＝輸入稅五志。穀價五十志＝輸入稅二十志）を設くべき旨を告白したり。於是同盟黨の失望ハ一方ならず、格氏の如きも斯る處置ハ窮厄の極に際せる國民を蔑にするものとなし、大に反對を試みたれども、政府ハ大多數を以て之を通過せり。幾もなく政府ハ亦全國の困厄を救はん爲め大に

ピール在來の穀法に小改革を行ふ

税則改革

所得税

四十二年の財政改革は是れ自由貿易的政策

税則を改革し、製品半製品の税課を殆んど皆無の姿となし、既製品も成べく其限制税を節減し、此變革より生ずる一時の不足は、今より五年間歳入一磅に付七片の所得税を課して之を補ふの方案を立てたり。此時税則調査の任に當れる商務局次長グラッドストーン氏が、後格氏に向て「余は千八百四十二年、千八百四十五年、千八百五十四年、及千八百六十年都合四回の税則改革に關係せり。第一回の勞は殆んど後三回を合せて之を六倍したる程なりき」と告たる如く、千二百個の物品中全廢若くは節減を要せるもの殆んど七百五十品の上に出で、具氏が説明の爲國會に起立したるを百廿九度に上りし程の大改革にして、其穀法、砂糖税等を撤去せざりしに關せず、其實全く自由貿易的財政案に外ならざりしなり。然り而して之に逡巡せるものの啻にピールの麾下のみならず、格氏も亦其の目下焦眉の急たる穀法を忽諸に附したるが爲一時大に反

ピールの心中

對を唱へしが會期の末に至りて漸くピールの心中を察するを得たり。ピールの心中とは何ぞ。此財政改革の時に臨み保守黨首領は演說して曰く、最廉の市場に買ひ最貴の市場に賣るは萬人の共に許諾する處なり。然れども余若し曩に提出せし所よりも更に大なる變革を穀法に行はゞたゞ一國の災厄を添ふるに至らんのみと。已に自由貿易に傾きながら猶其麾下を憚りて穀法撤去を敢てせざるの胸中以て見るべし。然れども如斯き事は決して永續すべきにあらず。此時格氏其兄に書を寄せて曰く、

格氏の預言

ピールが局外黨の首領となること恰もあるべからず。老鐵公（ウエリントン）死し去らば、彼は一ヶ月を出でずして極端保守黨と喧嘩すべし。其內心に於ては、彼と極端保守黨との關係は恰も余と御身とが渠輩に對するの關係に異ならず。余は今現に彼と其黨派の急激者流との間に

同盟と諸政黨との關係

遏止すべからざる猜忌の漸く累なり居るを推するなり。格氏が預言の果して驗あるや否やは、三年の後に至りておのづから分明ならむ。

此時に當り同盟黨の勢力次第に增加し、嶄然頭角を政治世界に擡げんとするに從て立脚の地に惑ふものあり。於是格氏は九月マンチエストルの委員會議に於て演說して曰く。

中等社會の運動

勞役社會が常に我儕の講談に出席し、また請願書に調印せることは是れ明白なる事實なり。然れども我儕は中等社會が常に用ゆる所の方法によりて運動をなし來れり。我儕は淑女の援助を得たり。我儕ハ茶會を用ひたり。また總て我儕が意見を實行せん爲めに平和の手段を用ひたり。是れ即ち我が中等社會的運動者なるを表するなり……我儕は政治團躰にあらず。我儕は保守黨に買はるゝをを拒みたり。我

儕ハ改進黨より離れて立てり。我儕は急進黨若くは劵狀黨と聯合すること」を爲さゞるなり。然れども我儕は何時なりとも穀法及凡て食糧に關する限制をば直ちに全廢せんとする者に向て援助の手を予ふべし。

已に十萬磅を使用せり而して穀法は少しも動かず

是迄同盟黨に使用し來りし所已に十萬磅に及びたれども穀法の塹壘依然動かざれば、同盟本部は新に巨額の金を募り、更に幾隊の遊説者を派遣し、各郡各都府の撰擧人にハ續々小冊子を贈り、演説會、集會、茶會、引續きて機關新聞はます〳〵筆鋒を鋭ふし、右より左より前後相呼應して以て敵に迫れり。而して格氏は武氏トムソン氏と共に此時を以て英蘭の北境を越へて蘇格蘭に侵入したるに、勢恰も破竹の如く、各府各邑戰はすして陷ち、グラスゴー、エディンボロー、ダンディー、ポルス、スタルリング、カークカルディの各都府皆府民權を格氏に贈り、フヲックス、モ

蘇國同盟の手に落つ

英國は如何

ールの如き大地主すら全く其の方向を一變し、蘇格蘭の一國は今や同盟の手に陷ちたるが如く見へたりき。翻て英國を見れば上流社會の反動愈劇しく誠に前途望なき光景なりき。

千八百四十三年ピールとの爭

千八百四十三年の國會は格氏に取て尤も苦痛なる事件を以て開けり。今其事由を尋ぬるに、開院の夕に當りピールの秘書官某氏一狂人の爲めに銃殺せられしが、此ハピールを狙擊せんとして誤て秘書官を射れるものなりとの風評何時となく人口に上りて、比氏いたく神經を病まし居たりき。然るに此折國會に於ては目下疲弊の狀況に就て大凡五夜に渉れる討論あり。其最終の夜格氏は立て反對説を辨駁し、次で比氏に向ひ『目下の窮厄は比氏が他事件にのみ注意して穀法を忽にしたる結果なれば、其責は單へに比氏の上に歸すべきものにして、氏は宜しく自ら此に當るべく、徒に之を他人に負はしむ可らず』との旨を痛論したり。

國會の亡狀

其の影響

比氏は聞くと齊しく烈しく激昂して立上り、斷續せる聲を以て「格氏は責を余が一身に、一身に負はせんとしたれども、假令如何なる事ありとも、余は決して他人の脅迫によりて」云々と憤り、政府黨は一齊に聲を放ちて格氏の辨解を妨げ、滿場沸くが如く喧噪を極めたる後、格氏ハ漸くにして單に責をビール氏の上に歸すと云へるは、即ち氏を政府の代表者として斯く云へるものなり」と辨解し。比氏も不勝〳〵に承諾せり。比氏はもと天性短慮の質なれど、常に自ら制し、其の公衆の前にて怒を發したるは只此時のみなりしと云ふ。大凡事のまさに緊迫せるに當ては、些瑣の動力も其固有の力よ倍蓰する程の影響を及ぼすものにて、保守黨が「格氏已矣」と云ひ、ブロハム卿の如きは「憐れなるコブデン氏の滅亡」などゝ唱へたるに關せず、格氏自ら「前金曜日の事は愈我黨の利となれり」と云へる如く、沈着なる中立者は玆に初めて心を同盟黨に傾け、而して同盟黨は之が爲にます〳〵奮激し、日々に書を寄せ、會を開きて、格氏を慰勞するを引も切らず、終に格氏をして左の言を發せしむるに至れり。

同盟黨は始めより穀法の全社會に害あるを認めしにあらず

公私樣々の理由によりて、余は斯る一身上の事（即頌贊稱譽の類）を好まず。此より後斯る一個人頌贊の事は我儕成るべく之を避けざるべからず。余が長所は質朴なる働、樂屋內の勞力、及集會の席に在ての常識（コンモンセンス）なり。余は斯る公表顯揚的の事に當るの力なく、また之を嗜まざるなり。

初め穀法排擊の事起るや同盟黨の多數は、只穀法の我一階級の害たるを知りて、未だ全社會の害たるを知らず。所謂排擊の事も、已が一階級の害を刈り利を樹るの主意にして、曾て博愛の義擧にあらざりしなり。之を以て千八百三十九年より四十二年に至るまで、其力を用ひ來れる所、多くは都府市邑の間にあり、其說く所は巨商、小商、製造家、勞役者等に過

攻擊の方向一轉して地方郡村に向ふ

郡村地方次第に戈を倒にす

ざざりき。然れども彼等が以て一階級の利害となせし所は、計らずも全社會の利害と一致し、自家の門戸を掃ふの箒は却て全街の塵を清め、私利の擴張者は何時しか愛國の救濟者と變じ來れり。於是乎、本部委員は爰に其策略を一變し、同盟全軍の力を擧げて地方郡村の間に攻入り、專地主、農夫、小作人等に向て穀法の弊害を說明せり。此時は恰も多年商工社會を害噬し來れる穀法が、已に不幸なる勞役者を屠り盡して、今や却て農家に向ひ、窮乏の情態次第に地方に著しくなれる折なれば、同盟の攻擊は方に千金の好時機にして、其初に當ては農夫中にも我村內にては演說を聞くを憚り、三四十哩の外に行きて聞くものあり、地主の中にも聽衆の後に潛みて耳を傾くる者ありしが、終には格氏等を招持し自ら進んで演說會を開くものあり、千二百人の集會に於て八百人の農夫が穀法全廢の說に贊成を表するあり。反對の猶多く偏僻の尙盛なるに拘

敵も味方も格氏を同盟の首領となす

はらず、一國の輿論は駸々として同盟の方に傾き苟くも此風潮を逃さずんば、穀法全廢の成功も亦遠きにあらざるが如く見えたりける。此時に當り敵も味方も皆盡く格氏を推して同盟の首領となし、指揮の大任は何時しか其身上に委ねられ、其の國會の論場を出でゝマンチエストル本部に在るや、八方より山の如く蒐集し來る報告を點檢して、大局支局の趨勢を案じ、蘇、英、ウエールスの各支部より續々來會する使節に接し、書翰を發して一々號令を傳へ、ブライト、ヴ井リアルズ、キブソン、トムソンの諸氏と共に運動の方策を畫する等、煩紛の勞雨の如く注ぎ來るに拘はらず、少しく隙を得れば直ちに遊說の程に上れり。殊に攻擊の方向一轉郡村地方に向ふに及んでは、直に本營を出でゝ武氏と敵地に乘入り、後氏が「此時余は公會の中に住したり」と云へる如く今日マンチエストルにあれば、明日はリンコルンにあり、此週サリスベリーにあ

上下大小齊しく努力す

れば、來週はハッディングトンシャイルにあり、日々三十哩以上の路を旅行して、集會より集會に、演說より演說に移り行き、或は荷車の上に立ち、或は旅館の門に立ち、或は穀倉の中に於て、日々農夫を相手に穀法の利害を論じ、霜晨雨夕曾て一日も集會を廢せず、氏自ら其身躰の能く堪へ得るに驚きて「余は皇天が同盟黨に向て特別の祐護を與へ玉ふ如く思ふなり」と云へる程なりき。首領己に如斯くなれば、富商は金を吝まず、遊說者は身を惜まず、小冊子の配達人に到るまで皆同盟の命運を一身に負擔して孜々として其方面に當れり。今其運動の一斑を示さんが爲め、此年の統計を左に掲ぐべし。

一八四三年秋期統計(マンチエストルの部)

英蘇の撰擧人に贈れる小冊子	五百万部
一般人民に配布せる小冊子	九百万部
此噸數	一百噸
此配達者	五百名
遊說せる都府の數	一百四十ヶ都府
農業地方に於ける大集會	二十五度
此年の費用	五万磅

千八百四十四年一頓挫

如斯く、千八百四十三年に於ては、同盟黨の勢力頓に加はり、恰も疾飈の勢を以て穀法の城砦を拍てるに引易ゑ、翌千八百四十四年には忽ち一頓挫を生じたり。殆んど五六年間一年は一年より窮厄に陷りし商業社會の情態、今や少しく恢復の徵を現はし來りしが爲め、國會は穀法問題を放擲するを喜び、ピールは此時を以て政府は毫も現時の穀法を更革するの意なきを示し、以て農利黨の心を收め、議院の衆耳はまた格、武、維諸氏の議論に傾かず。格氏の如きも其決心は少しも動かざりしによせ

かざるも希望の熱は減ず

(56)

同志に勸めて郡部撰擧權を購はしむ

希望の熱度は聊か冷却したりしと見る、其兄に寄せたる書中に記して曰く、

今や、我儕が自由貿易運動も、初め思ひしより更に長久の時日を要するを明らかになり來れり……よく此事を成就すべきものは只時日のみ。暴進激動は決して之を爲す能はず。我儕が斯く思ひしは誤まれり。

於是氏は同盟黨か國會の外に得來りし勢力を以て次回の撰擧に敵黨を打破らんが爲、一ヶ年四十志(シリング)の價格ある土地を購ふて以て郡部撰擧權を握らんをを勸告したるに、大に全國同志の贊成を得、ヨルクシヤイル、ランキアシヤイル、チエシヤイルの三郡のみにて此土地購買の爲めに擲ちたる金額大約二十五萬磅、新に撰擧權を得る者四千人に上り、而して全英國に於て格氏の意見に從へるもの殆んど此十倍に垂んとせり。

千八百四十五年

斯りし程にピールの財政改革次第に其功を奏して、商業社會の景氣漸く舊に復し來れるのみならず、殊に近年に稀なる豊作の二度まで打續きたるが爲め、千八百四十四年より同四十五年の際にかけては穀物の價も下りて四十五志となり、一般の困厄や稍緩なるに到れり。格氏が「現今の情態は即自由貿易説の眞理を説明するの適例なり」と云へる如く、同盟黨が常に唱ふる「糧食高ければ賃銀下り、糧食下れば賃銀騰る」の説は、今現に其證據を眼前に顯はし居るに、焦眉の急やゝ緩となれるが爲め、一般贊成者の熱心も聊減銷し、集會は猶群集しバザールは猶繁昌するも、同盟の鋒先また舊時の鋭に似ず。

一般贊成者の熱心減銷す

同盟更ら

(57)

於是乎格氏は一聲の號令を下して曰く、諸君若し議院の床上に語らば、其音聲は高ふして全國に響かん、諸君若し議院の内に在て勁烈の一擊

に攻撃の方向を一轉して國會に向ふ

を加へば鞭長ぶして全國に達すべしと、乃ち同盟は、茲に其進路を一轉し、已に市町を破り郡村を破りたるの餘勢を以て、盡く之を國會の一點に集注ぎ來れり。而してピールの方案商工社會の情況を一變するに力ありしも、農夫、小作人の景狀ます〳〵困難の地位に陷れるの事實は「食物の多きは以て工商の福祉を增進するも、現時の保護制法は到底農夫を救ふ能はざる」の理を表證し、保護黨の根據次第に搖漾するに乘じて、格氏維氏等は農夫の情狀に照して穀法の全社會に害あるを論じ、武氏は遊獵律を攻擊して小農の信依を受け、國會に於ける同盟黨の勢力茲に大に增加し來れり。此時格氏は一友に書を與へて曰く、

我儕大渦中にある者は、果して進み居るや或はたゞ同處に回轉し居るやを自判する能はず。然れども余は敵軍退去の徵候已に顯はれたりと思ふなり。

七年の苦辛殆んど水泡に歸せむとす家事の困難

今や市町已に破れ、郡村已に破れ、國會の堅陣また將に破れなんとする此の時に當り、不測の患格氏の頭上を覆ひ來り、七年の苦辛もあわや水泡に屬せんとするの危機に迫れり。

是より先、格氏が將に戰場に入らむとするや、從來の結社を解きて、別に其兄フレデリッキと結社し事務の管理を彼及其諸弟に托し、また一家の庶務は之を夫人（名をカセライン、アーン、ウヰリアムスと呼びウエールスの生れにて風姿優美、性質溫和の少孃なり。千八百四十年五月結婚す。）に委ね、尙時々歸て監督するの計畫なりしが、氏が地位の上るに從て其の閑愈乏しく、偶ま瞬時の暇を得て家にあれば、亦忽ちに急使を以て促され、七年の星霜終に家事を理むるの閑を得ざりしが爲に、事いよ〳〵困難を極め、氏が一日の奔走に勞れはて、旅館の椅子に倒れ坐せる時も、縷々として家事の困閑を訴へ來る其兄の書に接するを屢々なりき。然れども氏は今將に終局に近かんとする戰場より退くに忍びず、荏苒數十月に渉り

再び最後の戰場に臨むを得たり

たるに、此年九月頃に至りては最早一刻も猶豫する能はざるの場合となり、幾度か苦痛の考案を凝せる後、終に奔走を止めんと決心し、當時蘇格蘭に遊説せる武氏に書を寄せて其心事を訴へたり。然れども皇天志士を棄てず、武氏及諸親友の盡力によりて、格氏も一時破産の急を免れ、再び最後の戰場に臨むを得たり。

第五章　自由貿易　其下

千八百四

同盟黨が運動を始めしより已に七年、一粒の芥種は年と共に長じて、今

十五年同盟黨の勢力

は凌霄の大樹と變じ、蘇格蘭、愛蘭は早くも其手中に落ち、英蘭、威爾斯の市邑も已に其風に靡き保護黨が最後の城郭と聞へたる郡村地方すら續々軍門に降り、千八百四十一年の頃に當ては杳々として遙に千里を隔てたる保守黨首領ピール氏、改進黨首領ラッセル卿は、恰かも二箇反對の物躰が一箇の磁石に吸收せられて次第〳〵に近き來るが如く彼はスライゲィング、スケールの本城を出で此は定税の堡塞をいでゝ不知不識同盟の本陣を去る數歩の域内にまで近づき來れり。然れども格氏が「余は信ず、理論上にはピールは常に自由貿易論者にてありしなり。然れども彼は純粹なる自由貿易は議院内の實地方案に行ひ得べきものと信ぜず、而して彼は多勢の劣等動物に羈せられたるが爲め、已が隨意に歩するを得ず、彼等が歩むがまゝに歩まざるを得ざりしなり」と云へるが如く、彼には頑固なる保守黨の其一隊頸邊に纏繞し、此には猶未だ疑

保守黨首領改進黨首領

格氏ピールを評す

團猶豫の其胸中に蟠踞し、來らんと欲して來らず、一息の間を逡巡往來せるの時に際して、一揮の鞭聲意外の方向より鳴り來りて、終に最後の一躍をさなしめたり。武氏が「我儕が常に敵として戰へる其のものさえ今は吾儕の味方となれり」と宣言したる愛蘭饑饉即ち是なり。

愛蘭の西南地方に於ては人民の食物は只馬玲薯のみ、一臠の肉を味はずして墓中に入るもの十に八九に及ぶ程なれば、此年の秋に至り馬玲薯の盡く枯凋し去りたるが爲め、愛蘭は前代未聞の慘狀を顯出し、草根堀り盡して餓莩野に累々たり。而して此饑饉國に賦課する穀物輸入稅は一クヲーターに付十八志(シルリング)に上り居れば、今や之を救がふ爲めには宜しく果斷の處置を爲さゞるべからず。於是ピールは書をグラハムに予へて曰く假令穀物輸出、釀酒等を嚴禁したりとて、余は此の災厄を救ふ能はずと信ず。今日に當ては輸入稅を廢するより外に救助の法あるべ

内閣會議分裂す

からずと。然も尙其麾下を慮りて逡巡する所ありしに、愛蘭實況視察使に接して親しく悲慘の狀況を聞くに及でハ、最早躊躇する能はず。一週四たび内閣會議を開きて事を計りしが只アベルディン卿、シドニー、ハーバート、グラハム三名の贊成を得たるのみ。久しく釀し來れる不穩の感は愈此に發露して、スタンリーの諸人斷然反對を唱へ、終に決着を來す能はず。而して愛蘭啾々の聲は日にます〳〵英人の耳底に鳴り響けり。

此時蘇格蘭の首府には、烱銳なる一大敵(ラッセル卿)頻りに政府の擧動を注視してありしが、愈十一月二十二日を以て其撰擧區たる倫敦府に向けて一通の書狀を發したり。有名なるエディインボロー書狀は即ち是なり。其書中に告白せる言に曰く、

不決斷と遷延は思ふも恐ろしき厄難を生じ來らむ。今日は最早定稅

を爭ふの場合にあらず。皆共に力を併せて此貿易の障礙たり農業の害毒たり、各階級分爭の源たり、また人民の貧困、激動、死亡、罪惡の原因たる制法を廢滅せんことを務むべし。

定稅の堡壘倒る

定稅の堡壘此に至て倒る。

定稅の堡壘已に倒れたり、エディンボロー書狀は直ちにピールの心胸を刺衝せり。今は少しも猶豫すべからず。於是比氏速やかに內閣會議を開き意見を述ぶるに、スタンリー卿以下頑然として閣議終に一決せず。

ピール辭職す

於是比氏斷然其職を辭し、二週の間はまた其責に當るの政府あらざりき。

同盟黨まづ奮ふ

今や同盟黨は最後の戰場に際會し、勝利の光景眼近く逼り來りたれば、聲氣平生に十倍し、運動費の募集は僅々二時間にして六萬磅を得、集會集會相接して盛に其勢を張れり。格氏更に之を勵して曰く、

自由貿易派の地位

我曹は已に一個の主義一個の目的を以て働き來れり。更に六ヶ月間此主義を維持せば、久しく渴望せる目的の地に達し、主義の全勝を得て同盟其元素に返るに至るべし。

保守黨は二派に分裂して朝に立つの政府なく、改進黨は微弱にして單り其敵に抗する能はず、英國の政治世界は方さに氾濫たる洪水の樹を拔き屋を撤するが如き慘寥たる光景の中に於て、自由貿易派の一隊は獨り昂然として其頭を擡げたり。

ラッセル卿內閣組織の命を受く

ピール內閣已に倒れたれば、女皇は即ちラッセル卿を召して內閣組織の事を命じ玉へり。卿は即日書を格氏に送て「政府組織の事誠に覺束なけれども、若し其時とならば幸に商務局副長の職に就き玉ふことを望む」と述たれども組織の事ついに成らず。格氏が「卿を助けて主義を實行するが爲めには職に就かずして寧ろ現今の地位に留るを以て好と考ふ」

改進黨内閣を組織する能はずピール職に復す

比氏の覺悟

千八百四十六年

との返書の未だ卿の手に落ざるに、格氏は「同志の中に紛議ありて組織の事成らざる」旨を書き送りたる羅卿の書に接せり。改進黨已よ内閣を組織する能はざれば、ピール氏勅命によりて再び其職に復す。素より比氏の麾下にはスタンリー、ポッキングハム諸卿の如く、眞に保護説に執着せるより反對する者あり、ベンティック等の如く、比氏の變説を忌み、己を賣る者として憤る輩あり、またヂスレリーの如く之を奇貨として名を衒はんとするものあり、運動の困難なるは比氏よく之を知悉せりと雖も、今此難局に當るは氏の外にあらざれば、氏は麾下の半、改進黨及自由貿易派の聯合を以て穀法案に通過せんと決定せり。而して同盟もまた比氏の方案次第に扶助を予ふぶしと決定せり。

如斯紛亂騷擾の中に年は暮れて、明れば千八百四十六年、英國々會は近世史に比類なき光景を呈せり。七年の勞働苦心は格氏の身躰を傷り盡して、頭耳、咽喉皆用ゆべからず。然れども今や幸にして格氏自ら立て屢々其辨を振ふを要せず、靜かに其席によりて沈默せるまゝ同盟の運向を監督せり。以下起り來れる事件は其書翰によりて之を徵するを得べし。

ピール方案を提出す

ピールは遂に出產せり。然れども男兒と名くべきか、女兒と云ふべきか余は知らず、寧ろ二者の中間と信ずるなり。其方案は、諸穀法の全廢を千八百四十九年に延し、其迄の間は實際四志の定稅を課するの方案なり。此方案は駁擊するには好きに過ぎ、充分の贊稱を予ふる程には好からず。故に余は沈默を最上と思へり。今日余はラッセル卿の宅に開ける改進黨の重立たる面々の集會に出席したるが、彼等もピールを助くるの見込なるやに見受たり。（一月二十八日の書翰）

亦其友人に書を予へて曰く、

眞實を云はゞ余が政治的生涯を愛する念はいよ〳〵減せり。余は世

の所稱政治家となりて首尾よく務め得べしと信ずる能はず。黨派の桎梏は若し確固重要なる主義の爲にあらずば余に於て甚だ厭はし。されば其轡の中に余を驅らむとする人々に取ては、余は實に悍强不馴の者なるべし……實に偶然の事は好ましからざる高名の地に余を推し進めたり。是れ常に余が心を煩はす所のものなり。如何にして之を脱すべきか。余が一已の判斷によれば、穀法問題の決着を待て直に國會を退くの外なし。且余が盖し國會の生涯並に黨派的所爲を嫌ふの一事は、是れまた國會を去るの主意となるなり。然れども世に盡すが爲めには、此嫌惡の情に克たざるべからず。國會の中には、公衆の爲めに一身の便宜を擲つ善良の人物少なからず。以て彼陋劣なる目的の爲めに國會に出で來る輩を補償ふに足るべし……此好事業に盡力せるが爲めまさに公衆の識認を受くべきもの豈にたゝ余の

高名の地位を好まず

みならんや。余は恒に痛めり、英國に於ても、大陸に於ても、余と共に盡力せる尊貴なる人々の名聲が、單り余が名聲の爲めに蝕蔽はるゝを。余若し彼の決して余に劣らざるの熱心を以て身を擲ちし人々を除却し、共働の實益を盡く吾一身に刈り去る如きをあらんには、是實に不義の極にして、余が心も之を容さゞるべく、亦輿論も之を容さゞるべし(武氏もまた曾て曰く、吾友コブデン氏及余が名稱のみ傳誦せらるゝは是れ甚だ快よからざるの至りなり。同盟議會の中には名譽終に公衆の前に顯れざれども、公衆の前に尤も顯れ出たる二三人のみ賞贊に値るべきものと思はれんを、實に余が憂ふる所なり)

是より五月の末に到るまで、格氏が書簡中には、穀法問題の上院に於ける結果、及他の事件の爲め穀法一件の徒らに遷延せらるゝを憂ふるの意筆端に溢れたり。

昨夜、余は穀法廢止案の第三讀會に於て、多數と共に贊成を表するの

已が名譽の他を蝕蔽するを痛む

院を經過す

愛蘭鎮壓案

榮光ある特權を有したり。方案已に經過せり。月曜日には上院に達すべし。余は信ず、我儕は再び下議院に於て「穀物」てふ語を聞かざるべしと。議長が「此方案今經過す」と宣言したる時は喝采の聲大に起り、皆頻りに其帽を振れり。モルベス、マコレー其他多くの人々來りて余と握手し、主義の勝利を祝賀せり。(五月十六日の書翰)

穀法廢止案已に經過して、猶國會に沸騰せるは愛蘭鎮壓案なり。愛蘭饑饉は愛蘭紛擾を來し、愛蘭紛擾は在朝黨をして遂に鎮壓案を提出せしめたり。然れども愛蘭出身の議員は素より之に反對すべく、自由貿易派とて也之を贊成するにあらず。改進黨の如きも、已れ朝に立つに及んでは「常」に鎮壓の策を取れども、野に在ては常に反對を唱ふるの習慣なるのみならず、ピールをして先穀法廢止の困難に當らしめ、然る後鎮壓案に於て之を追ひ下すの一案は、是れ黨派的心中に免るべからざる所なれば、政府の命運は何れよりするも旦夕に逼れるなり。此時格氏は竊に書をピールに送れり。今其由緣を探るに、格氏がピールを見ること常にラッセル卿に優れり。故に氏は嘗て其書翰に述べて曰く、

政府の命運旦夕に逼る

ピールを見ることラッセル卿に優れり

凡ての改宗者中余はロボルト、ピールを以て尤も誠直眞實なるもの一人となす……然れども余はラッセル卿及改進黨に向て同樣の信任を置く能はざることを告白せざるを得ず。余は決して後者を以て德義上の感念の劣れりとするにあらず。然れども彼等はピールの如く此事を解せず。中等社會の首領は到底ピールならざるを得ず。

ピールに書を送りて辭職を止めむとす

格氏がピールに對するの感情如斯なれば、氏は比氏が辭職の色合を見て即ち竊に書を送り「比氏今辭職せば、漸く恢復し來れる貿易の景氣再ひ亂れ、歐洲諸邦の人民も疑ひ惑ふて自から其の自由貿易に向て進み來る足歩を停むべし。全國の輿論は比氏を贊する一方ならざれば、今議

比氏返書を送る

院紛糾の爲めに辭職せむより、速やかに全國に訴ふるに若かず」との主意を以て、懇ろに其辭職を止めたれども、比氏は直ちに返書を送り、先つ「穀法一件終らば、速やかに格氏と親しく交るを得て、往時の紛糾は一切消滅したるをを表せんと欲する」旨を述べ、且若し穀法廢止の爲に必要ならば、何時なりとも好んで全國に訴ふべしと雖とも、今は其必要なく、亦假令其一部に於て公衆の同感を得るとも、全躰に於て贊成を得ずんば、議院解散の事よろしからず、との意を答へ、格氏の意見は終に結果を見ずして了れり。如斯く下院に於ては愛蘭一件紛擾を極むるに際し、上院よ於ては穀法問題の沸騰するを數旬、六月二十六日遂に其結着に到れり。格氏は夫人に書を飛ばして曰く、

穀法案上院を經過す

最愛なるクートよ、喜べ、喜べ。穀法案已に經過せり。余が働は今了れり。余は明朝六時の滊車にてマンチエストルに下り、三時の同盟會に臨む。し。晩茶の頃には必らず家にあらんをを望む。

上院に於て穀法廢止案の經過せる其夕、下院に在ては政府愛蘭鎭壓案に於て七十三の敗北をとり、越て三日ピール内閣茲に辭職し、改進黨代て政府を組織す。其辭職の演說に於てピールは揚言して曰く、

ピール内閣倒れて改進黨之に代る

ピール格氏を贊す

諸君、今茲に此方案の成功と共に永く記憶すべき一の名稱あり。其はロンドンの議員たる貴縉（ラッセル卿）の名にあらず、また余が名にあらず。即ち彼の純白無私の精神を以て、不撓の氣力を以て、道理に據るの辨舌（其誠實素朴なるが爲めに愈賞贊に堪へたる）を以て、以て一日の如く其主義を辨護したる人物の名稱是なり。即ち、此方案の成功と共に應に永久に記憶すべき亦必らずせらるべき名稱はリチヤード、コブデンの名稱なり。諸君、余は此等方案の成就を以て猶豫なく彼れに歸せむとす。

如斯く八年の苦心其効を奏して穀法の城郭は己に陷ちぬ。穀法己に廢せり、非穀法同盟ハ應さに如何の方針をとるべき乎。素より格氏は始めより穀法ハ只自由貿易の進路に當るの第一關にして二關三關路未だ歴々たらざるを熟知せり。然れども「ベーコン」が「爾若し一握の眞理を有せば一時に一指を開くべし」と云へるが如く、成功の秘訣は一時に一事を成すにありと覺悟して穀法排撃の一事に全力を込め來れり。而して此第一關を破らば自由貿易の氣運は容易に前路の小嶺險を拂掃し去るべきを熟知せり。於是同盟黨に説くに「凡て社會上の改革をなす團結は須らく其目的及其時期を限制すべき」を以てし、終に七月二日大會をマンチエストル自由貿易館に開き、殆ど鮮血を以て塗抹せる英國改革史上に平和革命の一生面を開き八年の苦汗熱血を以てアダム、スミスが「ユトピア」の大根抵を英國に建て設けたる非穀法大同盟は、三たび自由

貿易の萬歳を祝して、全く茲に其團結を解散せり。

第六章　千八百四十六年より同四十九年に至る

穀法排撃は格氏が一生の大過渡なり。初め氏が此戰場に入るや、之が爲め限りなく政治の壇上に拘釘せられんとは思も掛ざりしなり。然して七年の戰爭はマンチエストルの一商人をして英國第一流の人物とならしめたるのみならず、また歐洲の眼光を延て其身上に蝟集せしめ、終に一歩も退く能ハざるに至らしめたり。同盟の解散より二日を經て、氏

名譽を得たるか爲めに失ふ所多きを感す

は友人に書を予へて其心情を述べて曰く、

余は天然及静朴なる生涯の嗜好の再び吾身に復り來るを祈らんが爲、まさに荒野に赴かむとして、今マンチエストルより一日程なる風光佳絶の谷間にあるなり。十年以前未た穀法の騒擾に入らざりし時、余は此家に一二日を過せることあり。當時の感情を以て今日の感情に比すれば、余は實に名聲を得たるが爲に損失せる所の甚だ多きを感ぜずんばあらず。慘刻なる暴風は余が静穩の港を奪へり。余は再び錨を卸す能はざるを恐る。去る木曜日余が集會に臨める時には、明日よりは静安幸福の人たるを得るならんと思ひしに。扨其翌日となれば――余をして明朝はマキンレスに余を待ち居る吾愛兒を見るを得せしめよ。彼若し余が煩惱を斷つにあらずんば、余は最早恢復の望なきなり。

永く安息を貪らず

然れども格氏が有爲の精神は永く安息を貪るを欲せず。更に書を一友に寄せて曰く、

余は埃及以太利に隱遁するの考を一切中止せり。先日は露西亞皇帝の親臣某氏の書を得、今日は佛國ボルドオ市長の書に接し、またマドリット、維納、伯林等より書を寄せて頻りに云々するものあれば、余は上帝の祐助により、是より十二ヶ月間歐洲諸大國を歴遊し、其帝王及政治家を見て已に我本國に於て向ふに敵なかりし其眞理を渠曹に勸說することを務むべし。余何ぞ懶惰萎靡して徒らに銹腐し了るべけんや。

是に於て氏は自由貿易宣敎の爲、一は英國の毒霧劇寒を避けんが爲、此章八月夫人と先ドーヴォルを渡りて佛國に入り、尋て西班牙に舊年を送りて、明くれば千八百四十七年一月直ちに以太利に赴き、駐留まると

諸邦の待遇

ウエストライディングの代議士となる

數月、羅馬ヴエニス、ミランの諸府を歴覽したる後、墺太利に路して伯林に至り、此處に夫人と手を分ちて獨り露帝ニコラスの朝に赴きたり。十四ヶ月の旅行は歐洲四分の三を歴遊して殘す所なく、帝王宰相及諸名士に會する毎に、謙和明切の辭を以て自由貿易の眞理を說き、其多數をして快然耳を傾けしめ、待つに賓客の禮を以てせられたるのみならず、到る處の人民爭ふて氏を歡迎し、祝筵を開き、賀頌を呈し、賞牌を贈り、僻陬の孤村に於てすら、樂人の一隊氏が旅亭を襲ふて讃美の音に耳を聾することゝ幾回なるを知らず。斯る光榮の間を經過し、歐洲全國の形勢を盡く其腦底に藏めて、此歳十月英國に歸着したる時は、身は已にストックポルトの代議士にあらずして、ヨルクシヤイル郡中一等の大撰擧區と呼ばれたるウエストライディングの代議士となり居りしなり。是より先き、穀法排擊の事終るや、諸方の有志者は格氏が私事を擲て公事に奔走したるが爲負債山の如くなりたるを聞知し、功勞の萬分一にも報せんと計りしに、一朝にして八萬磅を得たれば、一通の書を添へて之を格氏に寄贈したり。格氏素より深く此事を痛み思ひしも、其の

八萬磅の寄贈を受く

余若し富める否獨立のなし得べき場合ならんには、決して之を忍ぶ能はず。然れども余が年齡身躰の衰憊及余の外にハ頼る所なき憐れなる家族の事を思へば、今は公衆の救助を潔く辭すべき時にあらざるを覺ふ。

と云へる如く、今は辭退の場合にあらざれば、終に感謝して之を受け、直ちに一切の負債を償却し、また其旅行より歸り來れる時を以て、多年夢寐の間に往來せる其故鄉、即ちダンフヨルドの舊宅を購ひ、家業を疊み、マンチエストルの家をとざして全く此處に引き移れり。

ダンフヨルドの舊宅を購ふ

千八百四十九年に

此時よりして千八百四十九年に至るまで氏が關係したる所を列擧す

至るまで氏が關係したる所

農利を駁す

平民同盟を組織せんとす

れば、第一、穀法の關門己に破れて砂糖稅、航海律等の小險些隘は戰はずして滅亡し、格氏が預言せる如く、自由貿易は日に月に其根據を固ふするに關はらず、保護說は未だ全く其命脈を斷たず、保守黨新首領ヂスレリー氏が頻りに農利を主張するを駁擊し、「農業の奬勵は麵包の消費者に負擔を加ふるにあらずして、農商工一般の負擔を減ずるにあり」との主意に基きて盛に舌戰をなせる事。第二、改進黨羸弱にして保守黨は二派に分裂し深く恃むに足るものなき而已ならず、渠輩が一運一動黨派上の考を先にして國家民人の利害を後にするを憂へ、別に確固たる主義よ基き、着實の方案を具へ、財政改革（格氏か財政攻革の大主意は成るべく間接稅を變して直接稅となし、また兵備費用を節減して大に經費を省減するにあり）議院改革の二事を其綱領となせる平民同盟てふ一團結を組織せんと試みたる事。第三、其曾て普通撰擧の事を論ずるに當り

教育及宣誓式廢止を主張すピール方案の實行期を祝す

愛蘭問題

苟くも二者其一によらずんば、斯る變革（普通撰擧）には一歩を近つくことすら能はざるべし。所謂二道とは何ぞや、革命なり、學校なり、若し後者を執らば、永遠長久の改革を行ふを得べく、設し前者によらば、成就する所は只激烈浮躁の變革にして、西班牙の如くまた以太利の如く、再び壓制と無政府の狀態に陷らむ。

と云ひまた常に「英人は好き人民なり、たゞ其無學にして愚昧なるもの多きは實に一國の不幸なり」と云へるが如く、其尤得意なる敎育一件に盡力せる事、及宣誓式廢止等の問題に注意せる事。第四ピール方案の實行期（千八百四十六年一月より三年目なれば、千八百四十九年二月一日は其實行期に當れり）に際し、マンチエストル會館に盛大なる祝會を開きたる事等、一にして足らずと雖ども、專ら意を用ひたるは愛蘭問題なり。氏が愛蘭に關する意見は左の書簡によりて其一斑を窺ふに足るへし。

愛蘭の改革は人民の進歩にあり

愛蘭實際の困難は、上貴族より下コンノート農夫に到るまで、即ち一般人民の社交上、道德上の品位情態にあり。愛蘭をして開明自治の進路に跳躍せしむるものは、律法の躰裁にあらず、國會の位置にあらず、たゞ一般人民の變化と進歩是のみ。英國出身の議員にして眞に愛蘭の爲めに盡さんと欲する人々に取て尤も失望なる一事は、愛蘭を國會に代表する人々の品格なり。渠輩の中には事務的の人物とては一人もあらず、一の目的の爲めに快よく同心協力するが如きは二三人もあることなし。

愛蘭困難は氏が先知せる處

余は愛蘭の危險を先知否寧ろ實視したりと斷言するなり。何となれば其情態は余が其事を論じ始めたる時よりして毫も變化せる所あらざるなり。今より十四年前、余が家事紛擾の中より聊公務を考ふるの閑を得たる時、余は我國に關する政治上の意見を包括して一小冊

愛蘭の事に口を開かざりし所以

子を著はせり。素より詳細の點に於ては淺薄粗漏なる處多かりしも其三大綱領に至ては未だ曾て其說を變じたることあらざるなり。即ち第一、我政治の大禍害は常に外國の內政に關涉することにある事、第二、內治上の最大困難は愛蘭にある事、第三、合衆國は將來我國の運命を支配すべき經濟上の大敵なる事是なり。

斯く愛蘭の事に深く思を勞しまた屢彼邦に往來せる其人物が、國會にあること七年間、曾て愛蘭問題に關して一度も口を開かざるは定めて怪しく思はるゝならむ。余は足下に其理由を語るべし。余は彼のオーコンネルを頭に戴ける一躰の人々が愛蘭人氏を議院に代表するを知る。然して余が彼人々に向て同感同情を起す能はざる事、恰も言語通ぜぬ異邦人に對すると等しきを覺ふ。要するに德義上よりすれば余は全く渠曹を忌み嫌ふの感あり。オコーンネルは常に親切に余

地主的精神

愛蘭の病

を待てり。然れども余は彼と握手し其微笑の顏に對する毎に不穩の感を萠すを免れず。余が愛蘭の一大障礙と認めたる國敎會一件も、愛蘭改進黨員等は未だ曾て之を擧げず。渠曹が取消(一統律取消)と叫べる聲は明らかに是れ空々の音なりき。

愛蘭に於ても、英國に於ても、進步の大障礙となるものは、政治、社交、上に横行する地主的(貴族的)精神なり、……今日に於て尤も缺乏する處は、愛蘭の事を充分に訴ふべき(貴族的精神の横行せざる)議院若くは判庭にあり。我下議院は實に斯事を爲し得べき場所にあらず。

愛蘭の病は、實に複雜にして且年久しき痼疾なれば、唯一種の藥劑のみにては決して之を全治す能はざるべし。また假令千種の藥を用ゆるとも、今代の人々の生存中には愛蘭人民の情態に著しき變化を見るを難かるべし。今日の政治家大臣等が万事を擲て愛蘭の爲めに盡す

只一の計畫を有す

土地法より着手せずんば愛蘭改革は難かるべし

ことなきも、一は此理由によるならむ。

余は只一の計畫を有す。然れども余は如何にして之を實行せしむべきかを知らず。其計畫とは他なし、先土地を劃して小部分となすべし。決してアブセンティズム(アブセンティズムとは己が所有地より遠隔の地に住む事にして例へば愛蘭地所の持主が英國に住むが如き是なり)を釀すが如き廣大の地所を存すべからず。已にアブセンティズムと云へば、一敎區の內より離隔るゝことも甚だ不可なり。然れども我國會に、また內閣に、封建主義の依然として跋扈することを今日の如くんは、如何んぞ斯事を成し得べけんや。

愛蘭に於ては、少なくとも愛蘭の西南地方に於ては、財產と云へば、土地の外なく、勞役と云へば土地勞力の外なし。之を以て土地所有の點よりするにあらずんば人民の德義上肉躰上の情態を進步せしむる能はざるなり。故に余若し權勢を有するの身ならんには、直ちに廣大

の地所を破截し、人民をして各己が所有の土地に住ましむべし。換言すれば余は愛蘭を愛蘭人に與ふべし。

格氏が土地法の弊害を以て愛蘭紛擾の大根抵と認め、此改革の容易ならざるを知りて、先議院の制を改革し、以て中等社會の分子を議院に增加し、此力を假て愛蘭の大病根を救はんと欲したるの心情い、畧右の書翰によりて知るべし。

第七章　平和と戰爭　其上

旅中浮び來る三個の思想

一語將來を看破す

千八百四十七年格氏が大陸の旅行より歸るや、書を武氏に與て曰く、

余が旅行中常に浮び來る三個の思想ありき。即ち我英國が外邦の事に關して無用の驚駭心配をなすの愚かなる事、我國が更に外邦の事情を知らずして濫りに外邦の事に立入らんとするの誤れる事、及斯る事を廢して寧ろ力を自國の事物の改良進歩に用ゆるの遙かに優れる事是なり。余は今有力者間の輿論が全く我等と相反するを知る、此輿論を一變するには實に遼遠の歳月を要するを知る。されば是迄他の事件に於ても常に少數なりしが如く、此輿論の一變して多數を得るに至る迄は、余は少數を以て甘んずべし。

是れ實に氏が十數年の將來を看破したるの確言なり。左れば此の年パルメルストーン卿がアベルディーン伯に代りて外務大臣となれるの時よりして、千八百六十五年彼れ此れ共に俱に墓中に入るまでの十八

十八年間は是れ苦戰の時代

年間は、實に是れ巴卿の代表せる戰爭主義と、格氏武氏によりて代表せられたる平和主義とが、一勝一敗互に其の生存を競たるの戰爭にして、殆んと穀法排擊の一擧にもまさりたる苦戰の時代と云はざるべからず。

格氏の平和說

格氏は平和協會に屬し、常にクエーカー宗徒と運動を同ふせり。然れども氏は、彼謹嚴にしてしかも時務に暗らき友愛協會の人々が、如何なる場合に於ても戰爭を非とし、聖經の文句を引き來りて直ちに之を外交上に應用せんとするが如き擧動を學ばず。其非戰論は素より氏が曾て余をして軍備節減の辨護をなさゞるを得ざらしむるものは、磅志、片的の考にあらずして、德義上の感念なり。若し余みづから幾分か世の兵備を撤去する事に與つて力ありしてふ滿足を有するを得ば、余は喜んで墓中に入るべし。

萬戰皆非と唱へす

其駁擊する處は何ぞや

と云へる如く、道德上の觀念に基けること疑ふべからずと雖とも、單に是のみならざるなり。氏が絕大なる胷中には素より兵戈の音絕て簫韶の聲起る平和世界を理想せり。然れども十九世紀の世界は到底此理想を實行し得べからざるを確知せり。故に曰く、正當防禦の爲、一國の躰面獨立を保護するが爲には、兵備固より去る能はず「苟くも已むべからざるの場合に際せば、余自ら戰場に赴くを辭せざるべし。假令自ら戰ふ能はざるとも、余は病院に在てなりとも我職を盡すべし」と。然らば即ち格氏が駁擊する處は何ぞや、曰く一國の利害に關せず援軍の効を遺さゞる所謂義俠の戰爭なり、曰く羸弱なる國民に對する暴虐侵掠の戰爭なり、曰く貿易保護の口實を以て却て貿易の進路を礙くる兵備擴張なり、曰く勢を計らず理を思はず一時の恐慌に永久の釁を啓くの擧動なり、一言に約すれば無用の戰爭無用の兵備是なり。然り而して「英國が千六

百八十八年以來戰爭に費す所殆んど十五億万の上に出で、而して其戰爭は未だ曾て英國の海岸に於て戰はず、未だ曾て英國の家庭を保護せざるもの」なれば、格氏が所謂無用の戰爭は實に是れ英國が尤も得意とする所なりしなり。於是氏は感情的の說法を止めて新規の方角より一聲喝破して曰く、無用の戰爭は一國の不利なり。之を經濟上よりすれば、一國の貿易を礙し富源を涸すは即ち無用の戰爭なり。之を政治上よりすれば、無用の戰爭は無用の稅を課す、無用の稅を課するは即ち終に一國の騷亂を招く所以なり。以て內治の改良進步に使用すべき金錢時間を奪ひ去て之を鮮血の場に撒布するは是れ內政上の得策にあらず。之を外交上よりすれば、無用の戰爭は決して好を外國に修むる所以にあらず。更に一步を進めて曰く、戰爭は常に些細の源より起る。假令正當の戰爭なりとも、若し平和の手段を以て其目的を成し得べくんば、此れ

經濟上
政治上
外交上

却て彼に優らずや。余に一策あり、敢て新奇の策にあらず、また空々の策にあらず。即ち戰爭を些細の源に遏むるにあり。各國の委員をして公法公理により明らかに利害の係る所を察して之を調停し談判せしむるにあり。現今の社會は常に之を戰爭の後に行ふ、須らく之を戰爭の未だ大禍を孕まざるの前に行ふべしと。是れ格氏が平和主義の大要なり。

然るにパルメルストーン卿が職に外務に就てより四年間、年去り年來て紛紜いよ〳〵繁く、西班牙婚姻の事に關してハ殆んど佛國の好を破り、西班牙政府に懲戒を加へしめてはいたく其憤怒を招き、曰く葡萄牙事件なり、曰く瑞西紛紜なり、曰く意太利爭亂なり、曰くシ、リー騷擾なり、及ぶ限りの紛紜には盡く立ち入りて、然して其要する所を問へば只以て國威を輝かすといふのみ。於是格氏蹶起して其外交政策を難じ、北方諸府を歷遊して外交殖民に關する意見を發表し、尋で露墺連合して

戰爭に代ふるに調停を以てす
巴卿就職以來四年間の擧動

露墺の外債に應ずるを駁す

匈牙利の獨立を壓せんとするの事起るに際し、氏は他の一般英人と等しく義憤を發したれども、巴卿が艦隊を送りて匈牙利の聲援をなし以て後來クリミヤ戰爭の禍を播きたるが如き擧動を好せず、亦之を坐視せんとを欲せず、即ち一種新奇の援軍を試みたり。此時露墺戰爭の財源漸く涸れ口實を設けて巨萬の外債を英國に募り來り、而してロムバルト街の商人中將に之に應ぜんとする者あり。格氏則ち之を論駁して曰く、夫れ戰爭は自滅の性を有するものなり。然れども若し他邦人民が續々外債の募りに應じて其源を開く限りは戰爭は休むの日あるべからず。德義上より論ずれば、露墺の外債を承引するは直ちに是れ匈牙利人の咽喉を截ち其村を蹂躪するものなり。否幾何の生命まさに死活の間に賭せらるゝの時に當て冷然一室に坐して損得の計算を爲すは、是れ白刃を提て人を殺すよりも罪更に大なり。經濟上より論ずれば、莫大の

不道德なるものは必らず不安全なるものなり

利理歸一說

資本を不安全なる外國に貸附し外國戰爭の無底坑中に埋沒せしむるは經濟の主義に反す。人ゝ余を詰て曰ふ、爾が之を駁するは、其道德に戻るに由る乎、將其不安全なるに由る乎と。他なし二者共に然るのみ。大凡そ不道德なるものは必ず不安全なるものなり。銀主諸君は素より其財産を隨意に使用するの權理あり、然れども亦之を正當に使用するの義務ありと。是れ即ち氏が得意の利理歸一說にして、經濟の大法は道德の大法と全然一致するてふ警句は耳新しき說なれば、市町の民ゝ株券、利息、步割などの中間に理非曲直と云事の竄入し來るを忌み、格氏が朋友の中にすら「露墺の外債を駁するは平生の自由貿易主義に戻らずや。若し萬事に自由貿易を應用すへしとせば、何故に金錢の上に於ても、尤も高貴の場所に貸し、尤も低廉の場所に借るべからざるか」と訝れり。蓋し渠曹は共に是れ近眼の輩なりしのみ。

ドン、パシフヒコ事件

如斯く巴卿は戰爭主義を執りて內閣に立ち、格氏は平和主義を代表して野に在ること四年間、千八百五十年英國々會には有名なるドン、パシフヒコ事件の討論破裂し來り、格氏は國會の戰場に敵將と始めて花々しき死活の爭をなせり。

事件の起原

抑も此事件は、希臘に住せる英國配下の猶太人ドン、パシフヒコなる者が、宗教上の事よりして土人の爲めに家屋器物を破毀せられたるを憤り、價格三十倍の要償を希臘政府に促したるに起因せるものなれども、其實は外務大臣巴卿が豫ねて希臘政府及露、佛に對して深く猜疑の念を挾み居たるより、斯の些事の起りたるを見るや否直ちに希臘政府に隱謀ありとなし、直ちに希臘政府の船艦を押へ、また佛國の調停に對するに齟齬撞着の擧動を以てしたるに因るものにて、巴卿が外交政策中此の一件は尤も不手際なるものなりしなり。於是乎上院に於てはアベ

討論

ルディン、ブロハム、カンニング、スタンレーの諸卿連合して之を駁擊し、下院に於ては格氏を首めとしてピール、グラッドストーン、グラハム、チスレリーの諸氏鋒を揃へて巴卿が不當の所爲を痛論し、論鋒延て其の西班牙、葡萄牙に干涉したる舊失に及び、國會の論場は電光閃めき、疾風奔るの有樣となりしが、白髮の巴卿は此八方攻擊の重圍に陷りながらも、敵手すら贊嘆せる程の巧妙精力を以て、夕より曉に至るまで一々反駁應答し、激論四夜に涉れる後、最後の決を採りたるに、政府は四十六の多數を制し、巴卿は其の自贊せるが如く英國に於て尤も人望ある大臣となれり。是を巴卿が戰爭主義の第一勝とす。

戰爭主義の第一勝

政府の運命

斯くの如く政府はドン、パシフヒコ事件に勝利を得て一時旭日の昇るが如き勢なりしが、此年の秋ラッセル卿が敎號禁止案を提出して在野諸名士の駁擊を被りしより運稍傾き、翌千八百五十一年終にロック、キン

巴卿痛く女皇の譴責を受く

グ氏が撰擧權擴張の動議に破られ、改進黨內閣茲に辭職したりしに、保守黨首領デルビー伯は內閣組織の勅詔を奉せず。女皇は更にアベルデイン卿及グラハム氏を召して改進黨ピール黨兩黨の聯合內閣組織を命じたまへるも、ピール黨の諸士終に肯んぜざれば、舊內閣再び職に復したり。然れどもパルメルストーン卿は元來女皇の寵心を失へる人にて、暫時の間は其「漸くにして獲たる勝利の結果をば、見す〳〵敵に委するを欲せざる」が爲め、强て其職にとゞまりしも、程なく事を以て罷められたり。而して卿は此復讎として、直ちに政府の民兵案に修正說を起し、

保守黨朝に立つ

手もなくラッセル卿の政府を覆せり。於是デルビー卿勅を奉じて保守黨內閣を組織す。時に千八百五十二年第二月なり。

自由貿易の運命如何

保守黨已に內閣に立てり。自由貿易の運命如何。格氏深く之を憂て書をマンチエストル諸友に予へて曰く、

非穀法大同盟の再興

降伏か抵抗か

余は更に熟考しまたデルビー卿の演說を讀みます〳〵我心を決せり。自由貿易の安全を計るが爲めにハ、舊同盟の運動を再興するの覺悟なかるべからず。我儕は過多の騷動をなすに及ばず。同盟の幽靈は以て此問題を定むるに足らむ。諸黨派の恐るゝ處たゞ此ものゝみ。

格氏の書を得て、已に解散したりし非穀法大同盟ハ、再びマンチエストル自由貿易館に大會議を開き、格氏武氏の發議によりて直ちに巨額の金を募集し、撰擧爭に全力を込めしか、格氏は首尾能く舊撰擧區より撰まれ、マンチエストル派の勢力は少しも動かず。而して在朝保護黨は漸くにして信任欠乏の動議に抗敵する程の數を制し得たれども、今や渠曹は愈多年の城壘をすてゝ白旗を軍門に樹る乎、或はまた孤城に據りて墳墓の地を死守する乎、二者其一に居らざる能はず。素よりヂスレリーの機敏なる、保護說の時代は已に全く過ぎ去りたるを明知し、保護黨

否曖昧なり

邇氏の豫算表

の骨髄と聞へたるデルビー卿すら猶舊説を變ぜんとせるの折柄なれば、斷然降伏の旨を告白すべきなれども、渠曹はオメ〳〵兜を脱ぐの恥辱を忍ぶ能はず。於是出納院長ヂスレリー氏は先曖昧なる決議案を提出し、巴卿の援により辛ふして此第一險を經過し、續て歳計豫算表を提出したり。邇氏が狡獪なる、其豫算表をして一見非難の打ち處なきか如く見せしめければ、自由説の名士皆心を安んじ、格氏も亦書をマンチエストルに送て曰く、

彼歳計豫算表は愈保護一件の戰爭を結了せり。同盟は何時にても解散して可なり。

然るに一週の後更に討議を開けるの時に至りてよく〳〵見れば、其要點は大に麥芽税を減少して農民の益を計り、其不足は新に家屋税(重に都府市町に課せらる)を增加して之を補ふにありき。邇氏の烱眼なる此

の方案通過の困難なるを早く看破し、此危機を救ふにハマンチエストル一派と改進黨ピール黨と早く分離せしむるの外なしと信じ、則ち格氏を招きて竊かに之に告げて曰く、

保護一件は已に了れり、其の戰爭は全く終りを告げたり。卿等若し我黨を逐出さば、改進黨再び内閣に入らむのみ。然して改進黨は卿等の爲めよ果して何事をかなせる。渠曹は更に卿等の爲めに盡す所なかるべし。

格氏答へて曰く、

我儕は改進黨よりして官職を受けんことを願はず。斯る事ハ我儕が更に思はざる所なり。然れども我儕は到底足下の新家屋税を賛成する能はず。また足下の豫算表には此外にも賛成する能はざる所多し。

離間の策は破れたり。邇氏假令猛しと雖ともピール黨、改進黨、マンチエ

ストル派の聯合して攻撃し來る鋒に抗する能はず。政府終に敗北して一同辭職し、内閣組織の勅命ハアベルディン卿に下れり。於是卿はピール黨、改進黨、理論的急進黨（ピールスウォルスの一派にして、ミル氏之に屬す。マンチェストル一派は穀法排撃より起り來り、其唱ふる所重に經濟的政策の上に在るが故に、世人は之を經濟的急進黨と稱し、以て理論的急進黨と分別せり。）を聯合して一大内閣を組織せり。此内閣ハ大宰相アベルディン卿、出納院長グラッドストーン氏、内務大臣パルメルストーン卿、外務大臣ラッセル卿を始め、保守黨と格氏の一派を除き、凡そ下院の名士を網羅し盡せり。

ルイ、ナポレヨンの「クー、デ、タ」

千八百五十三年の恐慌

第八章　平和と戰爭　其中

是より先き佛國に於ては路易、奈翁「クー、デ、タ」の事あり、半夜遽に起つて志士を捕へ、庶民を屠り、大統領の位を奪へるより、南風日々腥膻の氣を齎して英人の心を攪擾し、殊に千八百五十二年の秋、たま〳〵ウエリントン公、薨去の事ありて、久しく世人の記臆より遠かり居たるペニンシュラ、ウヲトルルーの舊戰談、一時に英人の腦中に復興し來れる折柄、公の葬儀より三日を出でずして、英人は驚くべき一飛報に接したり、何ぞや、ウヲトルルー敗將の繼續者が今や大統領の椅子より飛んで佛國皇帝の寶位に上りたるの一事是なり。於是乎久しく英人の胷中に鬱積したる猜疑の念は、忽ち破裂して大恐慌となり、路易、奈翁がウヲトルルーの復讐を謀り居るてふ一句は、瞬く間に上内閣大臣より下馬丁工夫の心を動亂し、タイムスの探訪局には警報飛ぶが如くに群がり來り、非

職の武官は古劍を磨して時來れりと踴躍し、外寇論、國防論、ポルツマウスの危險、などゝ云へる小冊子は、雪片の如く國中に飛揚して都人士の膽を寒からしめ、非常の急報續々人心を激昂し、曰く佛國は西印度の英領鎭守府を奪ふの計畫あり、曰くシャンガーニエー將軍は倫敦攻陷の計策をなせり、曰くクライドの造船局は佛國政府より軍艦用意の命を受たり、曰く佛艦隊已に港を發せり、曰く佛艦現にドーヴヲルに現れたりと、影、重なりて形を生じ、響、合して音を傳へ、如何にシャンガーニエー將軍が斯る計畫なしと告白し、如何に造船局が佛政府の命令を受けずと辨ずるも、道理と事實は以て激昂の波瀾を回す能はず、恐慌は其膨脹性に從て日々に其勢を增加せり。

蓋し卓犖なる政治家が三寸の舌を以て其勢を皷し、有力の新聞記者が一枚の筆を揮て其氣運を鞭つ間は、恐慌は決して其跡を收めざるなり。

格氏深く其國民の好戰的氣風を傷む

況んや國民の氣風自づから此傾向を有するに到ては更に然らざるを得ず。格氏深く慨して曰く、

余は我國人が血戰せし場所に盡く赤點を附しゝモルケトル地圖の出版せられむことを望む。さらば過る七百年間に國內を除くの外殆んど我邦が外敵と戰爭せざる場所なきを見るべし。是れ他に比類なき所なり。我國民が世界中尤も侵襲的の國民なること豈に言を要せんや。ツラファルガール戰爭以來我島國は恰も別世界に住する如く些も他國の拘束をうくる患なかりき。然るに我國は大陸の紛紜に四億乃至五億万磅の巨額を費せり。國威赫燿論者は曰く、我等は歐洲の自由を救ひたりと。吁實に高價の自由なるかな。眼を放てカディズよりモスコーに至るまでの光景を見よ。我儕の一派が邦人の戰爭心を鎭せんと試むるに當ては、風も潮も皆我儕に逆ふを知るに足らん。

小冊子、三

風潮實に格氏の一派に逆へり。然ども氏は徒に傍觀する能はず「千七百九十三年及千八百五十三年」てふ一小冊子を著し、十八世紀以來の英佛の關係を叙述し、恐慌の眞源因は、極めて保守的なる英人が自然佛人の革命的氣象を嫌忌するより起るを說き、英佛の區別を明かにして恐慌の謂れなきを辨じ、亦ダンフヲルド住宅の新築を監督する傍ら「ビルマ戰爭の起原を論ず」と云へる一篇を草し、英國が羸弱なる東洋諸邦に對するの亡狀を痛く攻擊せり。此折の事なりき、氏マンチエストルに開けるの平和協會の集會に赴くの路、偶〻一友に逢ふ。友人連りに格氏を止めて曰く、今は實に折惡き時なり。人民皆恐慌の中にあり誰一人足下を以て誤れりとせざる者なし。格氏從容答へて曰く、されば こそ我儕は此處に集まるなれ。平和協會が一層盡力すべきは斯る時なりと。些少の團躰を以て一國の風潮に當り、纖細なる筆を揮て舊染の弊を掃ふ、格氏豈に其

小冊子、四

平和協會が一層の盡力を爲すべきは斯る時なり

恐慌去て戰爭來る

効無きを知らざらんや、坐視するに忍びざるのみ。

斯りし程に英佛の間を覆ひし恐慌の雲影は、何時しかドーヴヲルの海峽より捲き去り、西亞東歐の天に至りて此處に一團の妖雲と變じ、露土の關係愈切迫にして、英佛の關涉ます〳〵繁く、數月の前までは、北海々上に一大水戰をなして兩國の運命を決すべしと英人の臆想せる英佛二國の軍艦も、千八百五十四年の始に至り雙々相並んで露國セバストポールの砲臺を攻擊せり。

クリミヤ戰爭

如斯黑海戰爭已に端を開きて露、英、佛、土交々死活を爭ふの時に當り、英國に於ては內務大臣パルメルストーン卿其同僚の外交政策を因循の極とし、頻に故障を鳴らせるより、內閣は忽ち紛紜を生じ、聯立內閣微塵に碎け、故のピール黨は盡く辭職し、外務大臣ラッセル卿は、一度辭職して再び復り、再ひ復りて再び辭職し、英國政府は殆んど走馬燈の如く、頃刻

英國政府の動援

の間に甲去り乙來り、千八百五十五年の夏に至る迄、幾度か變轉更迭したる末巴卿終に大宰相の位に上り、一度平和の望ありし維納の調停會議も空く破れ、クリミヤ戰爭は依然黑海の濱に騷然たり。實に英國政府の動援未だ此際の如く甚しきはあらざりき。於是格氏喟然嘆じて曰く、余はデルビー政府を攻陷したるを悔ゆ、何となれば之が爲に我國は鉅万の財と三万四万の人命を沒了したればなりと。

只二箇の政策ありしのみ義戰を駁する由緣

此時に當り英人がクリミヤ戰爭に對するの感情只二つありし耳、一は巴卿の主義なり、一はマンチエストル派の政畧なり。蓋し格氏が此戰爭に反對したる所以は他なし、稱して義戰となすと雖ども、一度兵戈の渦中に入るに及んでは、主人何時しか客となりて、客は却て主人の地に立ち、戰爭の結果、一切の利害、徒らに援軍と敵國との關係に終わるのみならず、大凡一國の獨立なるものは、一國自ら奮起して立つにあらずんば、

愛國義俠の心膽なしとの嘲罵を反駁す

一度救ふも二たび救ふも三たび四たび破るゝのみ、强て之を援くるに於ては「却て其希望に反對するの結果を生じ、禁遏せんとする專横は却て之を激昂し、援けんとする邦國は却て之を失墜せしむ」るもの也。然るに、今「文明國の缺點は盡く摸倣して野蠻人の惡習は盡く保存せる、瓦解土崩の土耳其」を援けんが爲め、許多の危險を冒すは、決して英國の利にあらざるを以てなり。於是氏は先露土の形勢に照して英人の猜疑は空影なるを論じ、また愛國義俠の心膽なしと嘲罵せる某議員に答へて曰く、

今此和戰の問題を論ずるに當ては、余も亦他の紳士諸君と同位地に立つものなり。即ち余は單に政畧及手段上より政治家として之を論ずべき也。余敢て云ふ、戰爭皆悉く是なるにあらず、然も亦必要避くべからざるの場合あり。故に余輩は如何なる戰爭にも必ず反對する人

英國々會の職分

々と同列に見做さるゝことあるべからず……夫れ英國々會なるものは、英國の眞利益の外何事にも干渉すべからざるの團体なり。而して余は云はんとす、我國家、國民に取て眞正の利益たる事は、即ち全世界の眞利益に外ならずと。一個人としては、我儕も亦万國の爲めに博愛的事業をなして可なり、基督教徒としては、万人の福祉を願ふと勿論たるべく、凡て強暴の兇徒を懲し羸弱の被害者を救起するが爲めには權勢をも望む可き也。然れども余は斷言す、我曹は博愛的計畫を實行するが爲、亦皇天の明命を万國に強行せんが爲、自國の民に重税を課せんとて此處に來り會せるにあらず。我曹は一定の制限ある勢力及職分を有するの團体なり。我曹は此の帝國の眞利害を衛るに止まらざるべからず。

巴卿の心情

今日より見れば格氏の言決して空論にあらず。然もパルメルストーン卿の心中を察するよ、彼のランキアシャイルの一二商人が、苟くも外政にかけては天下敵なしとまで稱へられたる己れに外交政略を教へんと思ひも寄らず。況んや秘密策畧の外運轉機關なしと定まりし外務政廳に、渠輩が道德分子を注入せむとするに至ては、實に巴卿の堪へ得ざる處にして、其の武氏を罵て和尚と云ひ、格氏を嘲て狂人と云へるが如き、言劇烈なりと雖も、巴卿の心情よりすれば當然の事なりしなり。蓋し卿が斯る無禮の言を吐きて平然として顧ざりしものは、英國全体の後楯を有するを以てなり。實に巴卿が「此事件に於ては大英國民皆同心なり。余は皆同心と云へり、何となればコブデン、ブライトの如き者は計算に入るゝ能はざれば也」と云へるは、言誇大に似たれども其實眞に如此く、穀法排擊の時に當て格氏武氏が常に率て以て敵に當れる中等社會の一隊も「彼等は平生思ひしに似ず愛國心なき奴原なりき」と嘲て顔を

巴卿は全英國の後楯を有せり

大英國民皆巴卿と同心なり

中等社會

皆格武二氏に背く

急進黨も亦

非國教徒すらも

格武二氏の擧動

小册子、五

背け、急進黨は波蘭土、匈牙利の事を思ひ出でゝ露西亞征伐は即ち自由守護の戰爭なりと迷想し、非國敎徒の一團結すら岐路に迷ふ者多く、大英國中殆んど非戰論の跡を絶てり。誰によりて反抗の運動をなすべきか。渠曹は常に輿論に訴へたり、而して今や輿論は其面を轉じ去れり。渠曹は常に人民の勇將となれり、而して其士卒は今何處にあるや。

滿眼暗黑、一點希望の光りを存せざるの時に當り、格氏武氏は已に翅を剝ぎ去られたるの身を以て、滿朝の文武在野の衆庶が囂々然相和し相唱するの間に立て時に孤鶴の一聲を發ち、恰もボルクが風雷の辯を振て米國征伐を駁したる時の如く、亦チャールス、フヲックスが全英の反對を隻身に引受けて佛國共和政府征伐を論破したるが如く、武氏は絶代の雄辯を鼓して國會の內外に非戰論を唱へ、格氏は筆を把て「次は何ぞ」と題する一册子を著はし、英人が露國に對して甚しく疑懼を懷くの非なるを辨ず。此時格氏其志を述べて曰く、想ふに人民は讀まざるべし、然れども吾良心は安息すべしと。

クリミヤ戰爭終る

黑海の濱には砲烟彈雨の苦戰、英國の政界には平和の苦戰、苦戰の間に年を過ごす二回、千八百五十六年の春に到て英佛の同盟軍は遂にセバストポールの砲臺を陷れたり。此時露國はニコラス帝の崩御に遭ひ、今は防戰の利なきを知りて終に英佛の要求を容れ、佛、英、露、土、墺の使節は三月の末巴里に會して平和の條約を結び、クリミヤ戰爭於是全く其局を了す。此戰爭に於て英國將士の戰死する者二万二千人、費す所五千万磅に上れりと云ふ。

格氏が此後、格氏は演說して曰く、

斯る場合には戰爭の起原を論ずるも、戰鬪者に勸告するも、無用のみ。已に第一發を射、已に第一擊を下したる時よりして、道理と議論は盡く

戰爭に關するの感情

告別し去るなり。余はクリミヤ戰爭中深く此事を曉れり、即ち戰爭已に始まるに及んでは、如何に反駁の聲をあぐるも到底無益なることを深く實驗せり。故に余は政治社會にあらん限り、若し英國と他の諸强國との間に戰爭起らば、第一砲の發射せられてより平和の結ばるゝ迄は、余は決して口を開かざることを決したり。

戰爭主義の第二勝

沈勇格氏の如くにして而して此歎聲を發す、以て其痛苦の如何を察するに餘あるべし。實に此戰爭の二年間は、戰爭主義が勢力の頂點に達したる時代にして、平和主義は格武の二氏によりて僅に一髮縷の如き命脈を繫げるのみ。是をパルメルストーン卿が大勝利を博ふしたるの第二着とす。

厄運猶終らず

最愛の一子を失ふ

第九章　平和と戰爭　其下

クリミヤ戰爭終り、格氏は喇罵の間を出でゝ暫らく身を休むる間もなく、其家庭には殆んど氏が前途をも遮り盡すべき悲痛哀絶の一事起り來れり。氏が最愛の一子、已に十五の春を迎へてウエーンヘームの校舍に螢雪の苦を積める有望の一童兒は、圖らずも猩紅熱にかゝり、病氣の報ハ死亡の報と同時に双親の許に達せり。格氏後或る親友に書を與へて曰く、

余はクリミヤより歸れる佐官フィッメーヤーと木曜の第九時に會食を期し置けり。斯くて、其朝クロズヴェノル街なる寢室より下り見れば、佐官は已に來り居、食事の用意も已に整ひ居たり。卓上數通の書

翰あり。佐官に斷はりて食事を始めざる內先其書簡を開き、閲して第三通目に到りしに、我愛兒前回の書信には校中第一の强壯と記しありし吾愛兒は死して墓中にありとの知らせなりき。此より憐れなる吾妻に取て死刑の宣告よりも尙惡き(そは若し成るべくば彼女は千たび百たび喜んで愛兒の生命に代るべし)秘報を深く心に封じつゝダンフヲルドまで辿り行きたる余が苦は實際其場に當れる者にあらざれば解し能はざるべし。家に着して其摸樣を窺へは、吾妻は方さに快然たる面地にて數日前吾兒が猶健康の頂上にありし其折、學校より書き送りたる長き手翰を余が兄弟と他の家族等に讀み聞かせつゝありしなり。

此時氏が身上には一災一厄踵を接して來り、小にしては一家の收穫所得は皆凶作の不幸に遭ひ、兼て處理し置きし財政は計算盡く其圖に外

れ、夫人は兒の死亡に氣を失ひて呼吸せる偶像の如く、氏が半身と恃める武氏は十八年の勞動に病み憊れて政界奔走の望殆んど絕へ、万種公私の不運不幸は皆此頃刻に瀉ぎ來れり。格氏其書翰に述べて曰く、

武雷土の生涯に就ては余常に私の關係を有したり、何となれば曩きに一生の頂點(五十歳を云ふ)を過ぐるに當り、一切の主義意見は、擧て之を年更に若く氣更に盛なる且余が敢て僭望まざる雄辨の天賜をば充分に有する彼が身に讓り了れるが如く感ずればなり……恐らくブライトと余の如く斯く一點の翳もなき知心の交をなせる者は非ざるべし。愛兒の死亡に次で深く吾心を傷ましむるものは我武雷土の病氣なり。此二者は余をして全く力竭きしめむとす。而して余が心は恒に社會の舞臺を退くべき辭柄を求め居るが如く覺ふるなり。武雷土にして若し永く働く能はざるに至らば、是れ實に國家の大不幸なり。足下

若し議院に至りて其意見を問はゞ多數は必らず答ふべし、眞摯勇氣、誠實、雄辨を兼備ふる事彼が如きはあらざるなりと。然れども我等は決して彼を過去の人物として語るべからず。皇天幸に彼を快復なさしめ玉へ。

雲霧次第に消散す

此秋家族とバンゴルに赴き、心神を養ふを數月、夫人も次第に快復し、亦た議院諸士の篤く同情の感を表するが中にも、ブロハム卿は「人の心を死別の哀より脫せしむるは時にあらず勞働なり」とて連りに出府を勸めたれば、翌年の初ダンフヲルドに歸り、尋て政海の風波に餘憂を滌ぎ去らむと終に亦國會に出席せり。圖らざりき其前程には更に陷穽の氏を待つあらんとは。

第二支那戰爭

格氏國會に出席して間もなく第二支那戰爭破裂す。戰爭の起原は、アルロウと稱する舊英屬の支那船が廣東河上に往來して不正の商賣を營

格氏動議を提出す

むを以て、支那政府が其船を抑へ乘組の邦人を捕縛したるに基くものにして、英國所屬の期限已に盡きし後の事なるのみならず、假令期限中たり共、英人は決して支那政府の臣民をして同政府の法律に背くの所業をなさしむる權理なかりしなり。然るに香港大守は、ヨシ捕ふる所は自邦の臣民たりとも、英國領事にも告けず英屬の船に踏込みて捕縛するは英國を凌侮するの所爲なりとし、終に兵艦を進めて侵擊し、英政府は却て兵を遣はして之を援けたり。格氏が凌弱的戰爭を惡むを所稱義戰の比にあらず。即ち事實を列擧して政府の擧動を難じ「政府が表示せる文書ハ未だ彼不當の所置の理由を辨明するに足らず。故に委員を撰んで其事由を搜り、亦英支貿易上の關係を調査せしむべし」との動議を提出す。然るに國會に於ては、或は巴卿を追落して我取て代らんとするの野心より、或は眞に其所爲を非難するの衷情より、終に一種特別の同盟を

政府敗北す

生じ、ヂスレリー氏もグラハム氏も、ラッセル卿も皆盡く格氏の動議を贊成し、流石の巴卿も、遂に其鋭鋒を拂ひ兼ねて政府十六票の敗をとり全勝の譽は格氏の頭上に歸するが如く見へたりき。此時武氏たま〳〵羅馬にあり、報を得て快然書を寄せて曰く、

此報を聞て如何に喜べるやは明言するに及ばず。殊に余は此一擊が御身の手によりて加へられたるを喜ぶなり。

撰擧爭

然るに此勝利は是れ雨前の小霽、烱眼の巴卿は人望政府に存するを洞知し、直ちに國會を解散し全國に訴へたり。

撰擧はじまれり。格氏は最早舊撰擧區の望なきを知りたれば、反對の尤も少なかるべしと聞こへたるホッドルスフィールドに乘り入りて撰擧を爭ひ、亦當時病を以て羅馬にある武雷土氏の爲にマンチエストルを爭ひ、朝には友の爲め、夕は己が爲めに、畢生の心力を盡して奔走した

マンチエストル派の大敗北

れども、時利あらず格氏は政府黨の爲めに多數を制せられ、然のみか、ブライト、ギブソン、マンチエストルに敗れ、ブヲックスはヲールドハムに敗れ、マイアルはロックデールに敗れ、マンチエストルの一派盡く敗れて巴卿は比類なき大勝利を博ふしたり。斯くの如き大敗北は、千八百十二年ブロハム卿一派の敗北以來絶へて其比を見さる所なり。是れを戰

戰爭主義の第三勝

爭主義大勝利の第三着とす。

預言果して驗あり

今や平和主義は從て戰ひ從て敗れ、其勇將等が苦汗熱血は徒らに泡散し去りて十年の辛酸只一息を餘せるのみ「此輿論を一變するには實に遼遠の歳月を要するを知る」てふ格氏の預言は、於是乎其驗を見るなり。

退隱

其心情

議院に返るを急がず

第十章　二年間の退隱

マンチエストル派の大敗北より二年間、格氏はサツセツクスの私宅に隱栖し、社會に出るを甚だ稀なりき。氏某氏に寄せたる書翰中其心情を述べて曰く、

御身の屢々余が事を思ひ出玉ふを多謝す。余は今深く家豬甜菜の中に沒せり、御身が折々余をして政治の大渦に接せしめ玉ふにあらずば、余は恐る或はまた世に改進黨保守黨てふものあるを忘れ了らんことを。余は議院に返るを急がず。

また曰く、

縱令幾千の撰擧區が撰擧費までも引受けて余を撰擧せんとするとも、余は之を謝絕すべし。二晝夜も家の外にあれば彼の處世成功の秘

印度叛亂

殖民政畧を攻擊す

訣と稱せらるゝ寧靜耐忍の精神を余は保持する能はず。如斯き事情なれば一家の外に在ては余は實に無用の人なり。

然れども有爲の心は終に安息の時を知らず。治園養鷄の間にも萬般の問題は常に胷中に來往せり。第一に注意を促したるは印度叛亂なり。氏は尤もパルメルストーン流の殖民政略を嫌忌せり。實際貿易上の利害、土人の利害、本國の財を涸らし結合を脆弱にするの損害、及殖民地に設くる政廳の敗腐し易く亂暴の行はれ易き事實等よりして、常に殖民政略を攻擊せり。故に印度に對する氏が考案は「如何なる方法を用ひば印度は英國貿易界に一層の利益を予ふべきや」の點より發せず、寧ろ「印度を英の屬國とするは果して英國の眞利益なるや否」の問題より起し來れり。左に掲ぐる數通の書簡は氏が印度事件に對するの感情を明示すべし。

印度に關する意見

不幸にして余は印度の「改革」を計る人々と共にすら力を戮す能はず、何となれば余は英國が永久彼國を支配し得る力ありと信ずる能はざればなり。素より東印度商會なるものゝ、英國人民と其懼るべき責任（萬殊の危險を冒して印度を統轄するの任）との間に立塞（りて更に其責任の過重過大なるを見る能はざらしむ）るの屏障なれば、其廢止を望むを勿論なれども、余は我國會の統馭の下に印度を支配し得べしと信ずる能はず。假令下議院が一切內政整理の責任を解きて專ら彼億萬の亞細亞人を支配せんとするとも、事必らず破るべし。印度人は須らく地球の彼邊に住するものによりて支配せられざるべからず。其人民は對蹠の遠地より時々入り替り來る者等の善政に拜伏せんより、寧ろ其同色同族の者の惡（我曹より見て）政を望むなるべし。

印度人は印度人により支配せられるべからず

然れども此等は稍空漠たる議論にして、今日の實務に適せず。然らば今如何にすべき乎

今如何にすべき乎

今如何にして可ならん乎。彼國に於ける我平和の民は今や兵器を帶たる叛亂者の手に落ちたり、速に之を鎭せざるべからず。斯くすること我儕の職分なれ。鎭定必らず功を奏せん。然れども茲に困難の生ずるあり。

否、印度の將來は只困難、損耗、失望及恐らくは罪惡の外なからん。然らば今日己が信ずる眞理を告白し、以て他日斯る徒勞の事業（印度統轄の事）を全然放擲するの準備をなす者あらば、此人こそ實に國家に大功勞ある人物ならん。

また曰く、

穀法廢止に從事したる人々の中にも

穀法廢止の戰爭に與りし人々の中にも、眞に自由貿易の意義を曉り得たる者は誠に鮮哉。足下若しランキアシャイルの朋友等に向ひ云々するあらば、彼等は必らず論ずべし、我國若し印度を占有せずんば

自由貿易なる曉り得たる者は鮮し

土地法

印度貿易は全く廢らん、若くは他國の專有となるべし。と實に彼等は此議論こそ往きに己等が嘲笑し居たる保護論者の說なるを忘却せるなり。

次に氏が心を傾けたるは土地法なり。此弊や久しく英國政度に浸染し、其弊の極まる處小民は全く土地を剝かれ、地主は愈積蓄の便を得、而して其負擔する諸賦稅は此却て彼よりも輕きのみならず、土地讓渡に夥しき障礙ありて、少許の土地を讓受するの手數料は殆んど二三ヶ年分の借地料に齊しく、之が爲めに土地は全く舊地主の手に殘り、小農は隨意ま之を活用する能はず。況んや穀法廢止以來英國公衆が只管本國の豐作を切願するの情は聊か其度を減じたるにせよ、肉、牛乳、牛酪、鷄卵、鳥類の如きは日に月に需要を增加し來るの時に當りて、土地法の桎梏徒らに農家を束縛するが爲め、其產出する所實に些少の額に過ぎず。之を

他邦に比するも、英國の土地が財政の補助となること誠に僅々の割合なれば、此惡法を改革して「地面より追ひ拂はれたる小民を再びわが舊有の地所に復し」以て一國の公益農夫の利益を來すは是れ格氏が畢生の心願なりき。曩きに氏が愛蘭問題を論ずるや已に此事に論及せり、今や僻村陬邑の間に歸つて日々農民の情態を眼のあたり見るに及んでは、更に氏が心胷を刺衝するもの一にして足らず。此時土地法の事に關して頻りに奔走盡力せるホワイト氏に書を寄せて曰く、

露西亞を除くの外、大概他の諸邦に在ては彼封建制度も盡く破碎せられて年已に久しきに、獨り我國民のみ依然として此制度（即ち土地件に關して建政度の封）の下に服從し、默々たるは實に驚くに堪へたる次第なり。余は思ふ其理由は他なし、我國に於ては製造事業非常に增加して職業の範圍頗る廣大となりたるが爲、地所の不都合には更に氣付かざる

人民が土地法の弊害に注目せざる所以

ものならん。されば製造事業の繁昌せん限りは土地專有の弊を叫破するの號呼はあらざるべし。余曾て大陸を旅行せし時、佛、意、日諸邦の人民中少し考ある人々は、己に穀法を廢したる英人が何故に亦土地專有をも廢せざりしやを怪めるを見たり。茲に亦我人民が此問題に冷澹なる由緣を見るべき一事あり、即ち我邦人が殖民地を以て人口漏洩(即ち外國轉籍にあらずして我國領の一部より他の一部に轉移する)の塲所とすること是なり。

保守黨内閣に入る

千八百五十八年二月巴卿は謀殺人罰則案を提出し、ブライト、ギブソンの諸氏に敗られて終に辭職し、デルビー卿代りて保守黨内閣を組織す。格氏は書を一友に予へて曰く、

足下は現今の政況に就て余が意見を問玉へり。デルビーとパルメルストーンと其孰れをか擇まざる可らざるは實に余に取て迷惑の至りなり。然れども若し已むなくんば余はむしろ前者をとらん。黨派の

家政の困難

上よりするも國民として考ふるも、彼尊貴なる政界の僞り者(巴卿)が首として事に當るを見るほど我等に心苦しきはなし。然れども足下、如何にして彼れが忽ち勢力を恢復し來るを禦ぎ得べき。

氏が退隱中は家政の困難常に其心を煩はせり。氏曾て將來を慮りて米國イリノイス鐵道株を購ひ置きしか、餘れる資本はなくて目下の歲入を要する格氏の身分に取ては却て困難の原となり、拂込の金額多く滯ふりて頗る若心し居たる折柄、トマスソンなる一紳士之を聞て直ちに其困難を濟ひ、後亦格氏が同樣の困難あるに際して、彼紳士は氏が私宅を訪ひ來り竊かに巨額の金を贈りて其急を救へり。後彼紳士の死後、遺族は其手帳に斯く記し置かれたる一節を發見せり。

トマスソンの救濟に與る

余は偏に悲む、印刷器發明者以後の第一人とも云ふべき此人間の最大恩惠者が、斯る一身上の心配によりて公事奔走を妨げらるゝが如き

米國旅行

境遇にあるを。彼をして少しも顧慮する處なく人類進歩の爲めに奔走するを得せしむるは、是れ彼れが國人の任なり。然して余は聊か己が分を盡し得たり。他日吾兒等は其父が彼れに對するの分を認識したりしことを誇るべし。夫れ渠曹(兒等)の財産は多くは是れリチャードコブデン氏が自己を犧牲としたるの結果なり。

千八百五十九年の初、格氏は己が爲亦他の株主の爲め米國に赴き、イリノイス鐵道の景況を視察し、聯邦の著しく進歩せるさまを觀、加那太地方の形勢を一覽し、滯留三月にして、六月中旬歸航の船に上れり。

保守黨辭職す

巴卿内閣を組織す

内閣の一席格氏を待つ

第十一章　平和主義は戰爭主義と共に俱に内閣に立べき乎

格氏が米國に淹留せる間に、英國の政治世界は一大變動を生じ、保守黨政府は改革案に敗北して直ちに全國に訴へ僅に多數を制し得たりしが、改進黨の爲めに信任欠乏の動議を起されて終に辭職し、グランヴィル卿も其任に當るの力なければ、女皇は衆望の嚮ふ處を察し、巴卿を召して内閣の組織の勅命を降し玉へり。於是巴卿は直ちにグラッドストーン氏を出納院長に任じ、ラッセル卿を外務大臣に、チャールス、ウード氏を印度大臣にリウィス、カードウエル、ニューカスツルの諸氏を内務、愛蘭殖民、諸大臣に任じ、保守黨政府の顚覆より五日を出でずして、内閣の人員全く整ひ、今は只一席を剩せるのみ。此一席は曩に米國に遊び今方さに歸途に上れりと聞こゑたるコブデン氏の爲めに殘されたり。

斯る事のあるべしとは思ひも寄らず、六月廿九日を以てリヴヲルプー

景氏を港中に待つ

ルに到着したる格氏の喫驚は氏が夫人に書き送れる書翰を見て以て之を知るに足るべし。

昨日、余がモルセーを溯り來れる時は、斯る待遇の余を俟ち居らむとは夢にも思はざりき。群がれる數多の友は余を迎へて祝賀喝采し、船を離れざるに一束の書翰余が手中に置かれたり。其一通はパルメルストーンの手書なりき。

巴卿の手書

自由黨の諸派を網羅したる政府を組織せんとす

其手書とは如何なるものぞ。

「(前略)余は女皇陛下より政府組織の勅命を受けたり。余思ふに他の基礎の上に建てられたる政府は永續すべき望なく、また全國の滿足を博ふするに足らず。故に余は自由黨諸派の代表者をば悉皆網羅したる政府を組織せんとす。

ミルナー、ギブソン君も、從前の紛紜は盡く放却して、新内閣の一員たるをを快よく承諾せられり。余は足下も亦斯く爲玉はんをを切望し、則ち商務大臣の職を空ふし置けり。そは此職こそ尤も足下の意見に適すべく、亦足下が多年の閲歴功績にも尤も應じたるものと思はれたればなり。倫敦に着したまはば、速やかに面唔熟話をなさむことを望む。」

格氏の爲に商務大臣の職を空ふす

是れ巴卿の書翰なりき。格氏は其家信を續けて曰く、

他の一通は、余が承諾を強ひ勸めたるジョン、ラッセル卿の書翰なり。

ラッセル卿の書

其他の數通は、モッファット、ギルビン其外數名よりの書翰にて、皆余に辭讓せざらんことを勸めたるものなりき。

諸友の書

斯くて上陸し、旅館に投じたる處、忽ち迷惑の事起れり。リヴァプールの重立たる人々百餘名、余に祝詞を贈らんが爲、廣き室に群がり、ウ井リアム、ブラオン氏は其名代として之を余に渡せり。暫らくの後、財政

萬人皆入閣を勸む

氏が心中に決定せる處如何

改革協會のロボルト、グラッドストーン氏、米國商法會議所の會員にて平和協會會長たるラスボーン氏、皆數通の祝書を余に贈れり。しかして余は少しの考ふる暇もなく、頭は猶海の名殘にて搖漾しつゝも直ちに其返答を爲さゞるを得ざりしなり。是れ實に親切を以て人を殺すものなりし。余は諸友に逢ひ其説を聞かむとて此處(マンチエストル)に來りしに、ロックデールよりの使者も已に來り居、バズレー、アッシウフルス諸人より、入閣の招を承諾せんとを余に望みたる書に接せり。實に此度の事は誰一人異論を唱ふるものなく、急進黨も平和論者も、萬人皆盡く余を勸めんとするなり。

如斯く、北方諸都府の人民は其朋友たり勇將たり代表者たる格氏が政權の本城に入るを喜び、米佛の諸名士は、氏一度内閣に立て國際の紛紜其迹を絶つべしと相慶せり。然して氏が決定せる所は如何。

グランヴ井ル卿かラッセルの卿の内閣にてもあらば本意に背ても内閣に入らざるを得ざるべし

愈辭するの決心なり

然れども、余は實に思ふ、彼等皆狂へるなるべし。何となれば過る十二年間、余が巴卿の行狀に就て懷きし意見已に彼が如くにして、其意見は今も猶更に變更する所なきに、突然其下役に就かば、是余は自ら自重を損するものにて、今一時の氣に乘りて切りに余が入閣を勸むる人々の信任をも終には失ひ了るに至るべければなり。實に斯く万人の勸の切なれば若しグランヴ井ル卿か乃至ラッセル卿の内閣にてもあらば、余は本意に背ても「ライト、オノレブル」たらざるを得ざるべし。然れども、彼れ(卿巴)に對する余が意見の變更をも告白することなくて、今直ちに官職に就くは、是れ實に怪しからぬ事なれば、假令如何なる事あるも、余は其誘を諾する能はず。今日の午後まさに首府に赴かむとす、着せば直ちに彼に應答すべし。余は諸友の言を聽けり。余は默して何も云はず。然れども余が心已に決せり。

巴卿面會の始末

外交主義を駁す

内治政略を駁す

斯くて氏は直ちに倫敦に到り巴卿に面會せり。應對の始末は、格氏が其親戚に寄せたる書中に詳なり。曰く、

余が倫敦に着するや、萬事は差措き先巴卿に逢ふて何事も明白眞率に打明かすこゝろよけれと思ひしにより、直ちに卿を訪へり。卿は深く余を歡迎し、暫くの間は彼一件の外四方山の話を爲せり。斯くて余は終に話頭を破つて曰く「閣下は誠に大量に男らしくも余を内閣に誘ひたまへり。故に余は此事に就き來りて腹藏なく語らざるを得ずと思へり。余が思ふ所は斯の如し。過る十二年間、余は徹頭徹尾閣下の外交主義を攻擊せり。余は閣下が戰爭好み干渉好みまた喧嘩好みなるを信じ、閣下の政略常に外邦と葛藤を惹起し勝なることを信ぜり。且又余は閣下の内治政略に就ても一躰に信任する能はざるを表白し來れり。余が意見は或は誤りなりしやも知るべからず。然れども余は

敢て言を飾らず閣下に問はんとす、余は今閣下の内閣に立ち閣下より高譽高給の地位を受くるの時を以て、茲に初めて閣下の政略に對する吾意見の變更を世間に告白すべきか。斯る場合に際して、太西洋の濤船より直ちに閣下の内閣に蹈込まば、是れ自から人の嫌疑を牽起すものにあらざるなからんか。余は願ふ、斯く閣下の招誘を辭するは決して一身上の感情にあらざるを知り玉はんことを。余は閣下を以て危險なる主義の代表者とし、之を以て閣下に抵抗せり。若し一身上に渉りたる事ありしならば、是れ全く故意の所行にあらず、また斯る事は閣下も決して看過しにくしなし玉はざりしなり」と。巴卿は「斯る一身上の事は更になし。假令ありしにせよ三ヶ月間も記憶すべきものにあらず」と答へ、また打笑つて「ギブソン君が余を痛擊したることは足下にも劣らざりしと覺ふ」と云ひ、然る後彼は余が異議を難じ、眞摯な

外交を改革せんとせば内閣に入るの外なし

是れ巴卿か最利の論鋒

る面地にて、余が内閣に入らざるべからざる種々の理由を論じ、端を更めて曰く、足下も亦足下の諸同志も、皆外交政署の徒らに秘密にして常に人民に謀らずして戰爭を始むるを難じたまへり。然るに外交政署問題の決定するは惟内閣にあるのみ。内閣に於て決定したる後にあらずんば、我等は決して議院に計ることなし。故に足下にして若し此問題に與からんと欲したまわば、内閣に入りたまうの外なし」と。

是れ余が尤も返答に窮したる處なり。故に彼は強く此論を以て迫れり。

然れども余は依然反對を止めざりければ、卿は打笑ひつゝ「然らば足下は何故に議院には出たまうぞ」、余も打笑ひて「されば、何故か少しも存せず」彼は猶重ねて「併し、足下は如何なれば政治社會には入りたまへるぞ」余は答へて「其故とては更に存せず。其は只偶然の事にて、また

私情より入閣を勸むるにあらず

ブライト氏は内閣に誘ふ能はず

一種の目的（穀法排撃と指す）のためなりき。身の爲にも家族の爲にも寧ろ一私人に止まりしかた宜しかりしならん」於是彼は双手をさし伸べ、更らに高調子の笑をなしつゝ「併し已に入り居たまわば、何んぞまず進み行玉はざる」と。更に語を繼で曰く、足下、余は同輩を更代せんと欲するの私願より足下に入閣を勸むるにあらず。若し私情に任せなば、余はむしろ舊友等と共に從前の針路をとらむ。余が足下の入閣を勸むるは、足下が斯くせらるべきの權理あればなりと。

斯くて彼は余が「急進的自由黨を閣下の政府に代表すべき者は余の外にも多かるべし」と云へるに答へて「足下の外にしては只ブライト、ギブソンの二君あるのみ。然れどもブライト氏は常に諸階級を痛く攻撃せるか故に氏を内閣に誘ふ能はず」と云ひ、また是よりは戰爭に於ても必らず中立すべき決心なる旨を述べ、且余が内閣に入るにあ

内閣にあるとも事によりては直ちに走去るべし

今日に於て説の相反する處は只二件のみ

斷然動かすべからず

らざれば以て自由黨の諸派を網羅して鞏固なる政府を組織するを難かるべしと云へるにぞ、余は答へて曰く、ギブソン氏は余と全く同樣の意見を懷抱せり。故に氏が内閣に居る間は、余も亦自ら内閣に入り居ると同じく閣下の政府を扶助すべし。假令余自ら内閣の中にありとも、閣下若し余が堅く執る所の主義に反したる事を爲し玉ふ時は、余は必らず走去るべきものなりと。また更に語を繼で「今日に於て閣下と余と説の相反する處はたゞ二件のみ。故に閣下若し戰爭を戒め、亦適宜の議院改革案を出し玉はゞ、余は此外閣下に反對すべき點あるを見ず」と云へり。然も巴卿ハ猶頻りに勸めて曰まざれば、余は「此事に就て已に親切に入閣を勸め呉れたるランキアシャイル諸友の意見に悖戻るをも敢て辭せずと決心したる程なれば、余が心は斷然動かすべからざる」旨を答へ、また爾後相互の一身上政治上の關係は

夜會に招かる

夜會の摸樣

最大怪物

余自ら其内閣にあると同然ならんことを望む旨を述べて、終に立上れり。

談判終に整はず格氏まさに辭し去らんむとする時、巴卿は明夕其夫人の夜會に列せんことを望み、氏は快く承諾せり。以下まさに引續て氏が書簡を記載すべし。

次の夜余は初めてキアムブリッヂ館なるものに赴き見れば、身は無數の政治家風流社會の中央にあり、一群の珍客とはせられたり。數多の婦人は來りて珍しげに余を睇視し、また其友をも誘ひ來りて余を諦視せり。將に歸らんとする時、偶ゼコブ、オムニオムと一隅に出會せり。彼戲れて曰く、御身は實に此館内に未だ曾て比類あらざる政治上の最大怪物なり。パルメルストーン卿に對して入閣の招誘を辭しながら、此處に來りて卿を見る如き珍寄の事は、實に其比ひあらざるな

未だ曾て今回の事件の如く心を傷ましめたるとなし

皆艴然たり戚然たり

り。見まへ、彼の群衆の中には、斯る招誘を受けて踴躍せず、自己を以て商務大臣に適當と思ひ居らざる者は、四五人にも足らざるべし。

余は今回の事の如く感情を傷めたることなし。當初よりして已に我か斷じて否なりと思へる事をば、殆んど朋友全体によりて強勸せられむことは、余に取て尤も苦痛なる試錬なりき。余は未だ曾て政治上の事にて吾身を病しめたる事あるを覺へず。然るに此度の一件は實に余が健康を傷りたり。余は望む友人諸氏が熟慮する處ありて余を是認し、また余が斯く爲せしは全く良心より出でしを信ぜんことを。實に尋常の人情よりすれば、余は斯る決定は爲さゞりしならむ。

格氏已に巴卿の誘を辭せり。之か爲めに氏が内外の諸友は皆艴然たらずんば戚然たらざるなし。よく格氏の志を察し、假令今一旦調和して内閣に立つとも破綻の困難遠きにあらざるを看破して、斷然其所爲を賛

天下只一の武氏ありしのみ

商務大臣ころ尤も余に適せり

獨自一已を失はんことを恐るゝなり

成したるものは、天下只一の武氏ありしのみ。格氏は何を以て其敵手の開胷せる招誘を辭したるのみならず、併せて滿天下の朋友を失望せしめ、以て廣大の勢力を振ふべき千鈞の機會を見す〳〵放過し、斷乎として無位無爵無權無力の一平民政治家たるに止りし乎。請ふ氏をして自ら其志を陳せしめよ。

余は謙卑せず敢て云ふ、余若し内閣に立つべくば、商務大臣の職尤も余に適せり。然れども余は自家の信向に對して忠實ならざるべからず。余は吾に取て殆んど存在其もの〻ことを恐るゝなり。

吁節操の二字於此乎全し矣。

外交の要

國際の貿易を以て國際の戰爭に易へんと欲す

第十二章　英佛通商條約　上

「外交の要は政府と政府の關係を成るべく稀少にし、人民と人民との關係を成るべく繁多にするにあり……夫れ國際の貿易は國際の平和を維持するの紐鎖なり」とは、格氏が嘗て小冊子中に特筆したる一句にして、二十年來一日の如く主張し來れる氏が外交平和の主義も、要する、に、國際の貿易を以て國際の戰爭に易へんと欲するの主意に外ならず。然り而して幾度か失敗せし氏が素志は今や其晩年に近きて漸く緒に就き、彼一葦帶水を隔てゝ常に相睨睥し、一旒の祝旗も万馬の影を彼岸に覆ひ、一聲の笑語も巨礮の響を此岸に傳へたる英佛二國は、今や氏が手によりて通商條約を締結することゝはなりぬ。

主因者は武氏なり

ミセール、セヴアリエー氏

具氏に事を計る

條約締結には尤も好機會

是より先き、ブライト氏は千八百五十九年の國會に於て兵備擴張を駁撃し「斯る事をせんより、奚ぞ佛帝に勸めて其人民をして我國民と自由に貿易するを得せしめざる」と論じたるが、此演說佛國に達して格氏の舊友なる有名の經濟家ミセール、セヴアリエー氏の腦中に俄然通商條約締結の念を起さしめ、氏は直ちに此旨を格氏に書送り、尋で英國に渡航し來りしに、此時格氏はたま〳〵家屬と巴里に冬を過さんと欲し居たるを幸ひ、爲に一臂を添へんと決し、卽ちハワーデンに赴き、グラッドストーン氏に此事を計れり。然るに具氏の話によれば此翌年は偶多年繼續し來れる諸年金の滿期となる者多く、都合二百万磅餘の剩額を生ずるとのことにて、通商條約を結んで佛國物貨の輸入稅を減少するには尤も好機會なるのみならず、セヴアリエー氏も「通商條約によらずんば佛國稅則を改革するの道なし」とて切りに勸めて已まざれば、相談爰

格別の賛成もなく格別の反對もなし

佛國商務大臣ルーヘー氏

皇帝説服の困難

に整ひ、格氏去て倫敦に至り、パルメルストーン、ラッセルの二卿を訪ふて其志趣を述たる處、格別熱心の賛成を得ざれども、亦格別の反對もなければ、氏は十月中旬を以て直ちに巴里に到れり。

佛國商務大臣ルーヘー氏は熱心なる自由貿易家なれば、速やかに格氏の議論に承服したるも、茲に尤も困難なるは皇帝を説服するの一事なり。格氏初謁見の始末を其日錄に記して曰く、

(前略)皇帝は、其の既に十年間英佛の間に平和を維持せんとせられたるに拘はらず、新聞紙は盡く之を礙げ了りて英佛間の情態日に困難に傾くを歎息し、亦是迄用ひ來れる手段の外には、更に如何なる方法を以て兩國の親交を維持すべきかと問はれしにぞ、話は此に自由貿易の問題に入りて、余は二邦の人民をして一層親密に相依る能はざらしむる其障礙(即ち貿易上の障礙)を撤去するの必要を論じ、英國にもしかく

斯くするには困難多し

需用の尤も廣大なるものに就て先改革を行ふべし

鐵及石炭税

の便利あれば、英佛雙方の税則を改革するの好機會は即ち今日に在ることを説きけるに、ルイ、ナポレオンは「其政略は望ましけれ共、斯くするには困難實に夥く、佛國議院中多數は全く自由貿易に反對する者共なれば、到底之を可決すまじ。但し佛國の憲法には、若し國際條約中の一部分に屬する時は、一布令を以て税則を改革するを得るとの明文あれば、英國は果して通商條約を締結するを肯んずべきや」と問ひ、亦佛國の税則改革に關して余が意見を問へり。於是余は「先づ需要の尤も廣大なる一の物品に就て攻撃を下すべし、即ち曩に余が英國に於て自由貿易の障礙を打破せんとするに當り、大事の一點已に下らば全躰刃を迎へて解けむことを慮りて、穀法廢止の一點に全力を集めたるが如く、佛國に於て尤も重大なる需要は鐵にして、鐵は万業の糧とも云ふべきものなれば、余は先鐵及石炭税の廢止を先きにす

佛國に於ては常に革命をなす未だ改革をなせることあらず

皇帝の風采

べしと論じたり。然るに皇帝は、若し斯くせば多數の人民其職業を失ふの恐ありと云へるにより、余は即ち英國の例に照して、租税減少の結果は勞役の需要を減ぜず、却て著しく之を增加するものなるを論じ、猶種々の議論を以て其決して恐るゝに足らざるを説明し、亦ロボルト、ピールの成就せし改革の結果を詳述し、其名の甚しく尊崇せらるゝ有樣を述たるに、彼之を聞て曰く、余は御身の話に依りて我國に於ても同樣の事業を成さむと欲するの念を誘起せらるゝに堪へず。然れども佛國に於ては改革をなすを甚だ難し、そは佛國に於ては常に革命をなす未だ曾て改革をなさゞればなりと。

皇帝は丈低く、威儀なく、余は未だ斯く其儀容面貌の英雄然たる風采を缺げる人を見ず。然も其風采には苛厲なるさまもなく、また冷澹なる風も見受けられず。最初の問は其双眼も快然たる光を帶ざれども、

貴族的の王宮

平民的の大統領

暫らく英國に歸る

巴卿に勸告す

再び巴里に到る

會話の次第に進むに從て、兩眼暖かに濕ひ來り、彼もまた寛大なる感情を催ふし得ることを示すなり。

セント、クラウド王宮の門口には、步騎兵夥しく群り居れり……此等の莊嚴なる光景を見て、余が記臆は忽ち數月前ワシントン府に於て見たる光景、即門戸に一人の番卒もなく、家に一人の役服を着したる從僕をも置かず、身には尋常の黑服を着し、質素の生活をなせる彼合衆國大統領の家に客たりし其時に見たる光景を喚び起せり。

斯くて內務大臣フヲール氏セヴアリエー氏との討論に十日あまりを費し、家事の爲めに暫らく英國に歸り來りて、具氏を見、また巴卿に逢ひ、英佛間の感情に就て種々論ずる處あり、國際の交りは、紛紊煩雜の交際を避けて、寧ろ一個人間の交の如く、成るべく事を質素簡易になすべしと勸め、十一月中旬再び巴里に到れり。

寢室に於て佛廷の諸大臣と討論す

皇帝の意思未だ曖昧なり

皇帝終に通商條約締結の事

格氏が再び巴里に到れる時は、いたく身躰の和を傷りて、事を執るの勞に堪へざれども熱心は少しも衰へず、佛廷の諸大臣と其寢室に於て討議論辨すること數日。十二月初旬の頃に至りルーヘー氏の條約草案已に稿を脱したりしか、琉氏が「政府には只一箇の人あるのみ、皇帝是なり。只一箇の意思あるのみ、皇帝の意思是なり」と云へる其の皇帝の意思は、猶曖昧にして、一度傾きしもまた幾度か其困難を慮りて躊躇逡巡し、格氏は日々一喜一憂の間に漂はされたる折しも、佛公使歸り來りて、皇帝に告ぐるに、英國の人心が佛國に對する猜疑の甚しく、今日に於て速やかに其疑團を晴らすの手段を取らずんば戰爭或は免かるべらざるを以てす。於是皇帝終に其心を決せり。換言すれば、條約を佛國の利益と認むるよりも、寧ろ之を以て英人を和げ英國の同盟を保持する唯一の手段と認むるよりして、終に條約を許諾せり。

外務大臣を説服す

特命全權大使の資格を以て事に臨む

屢々不測の憂に惱まさる

斯くて琉氏が條約草案は全く皇帝の裁可を得、また外務大臣ワルウスキー伯に打明かされ、格氏は已にルーヘー氏フヲール氏及皇帝を説服したるの論鋒を以て伯の疑を解き其恐を除き、終に全く其同意を得、內輪の事已に整ひたれば、則ち佛國外務大臣より英國公使に向け公然其政府の意如何を懸合來り、英公使カウレー卿は直ちに本國の外務大臣に問合せに及び、千八百六十年一月の始めには、愈英政府より全權を格氏に委任する旨の公報ありて、格氏は則英國特命全權大使の資格を以て其事に與かれり。

如斯格氏が万般の細務にいたく心神を勞するが中にも、不測の憂に惱まさるゝを屢々なりき。即ち皇帝かやゝもすれば心を外事に轉じ、また通商條約の外に種々政策上の條約を添加せんとしたる事なり。格氏は書を具氏に寄せて曰く、

改革諷示の布告書を公にす

佛國に於ける影響

皇帝は我儕英人は甚しく此條約に重をおくと思ひなし、此を以て更らに他の事件に於て我國の援助を得るの賄賂となさんとするやも計るべからず。此好事業の成功を望むを深しとは云へ、余は決して斯る條約をなす如き事を許容さゞるなり。今日に於ては、我國が彼れの同盟を要するよりも、彼れか我國の同盟を要すること更に多し。斯る樣々の憂慮も次第に消へ去り、皇帝は反對の多きを先知しなからも一ト先草案を議院に下附し、また內閣會議に於て更に劇しき討論を經たる後、皇帝ハ愈其計畫を斷行するの意を示さんが爲、フヲール氏に予ふる書(即ち方に行なはんとする大改革を諷示せる布告書)を調製し、先格氏の訂正を經て、終に之をモニッーアの紙上に公にせり。

佛國に於ては、此一書大に沸騰を惹起し、有名なるチエール氏の如きは皇帝を諫めんと欲して日々謁見を求め、國中重立たる百二十餘名の紡

英國に於ける影響

績家は內務大臣の館前に群集して之に逼り、オルリアン黨は素より、經濟倶樂部の如きも未だ輿論の熟せざるに自由貿易を施行するは是れ壓制の極なりと宣言し、佛國一流の工業家某氏は其の自由貿易論者なるの故を以て己が甥さゑも握手するを拒めりと格氏に告げ、是より十三年前、格氏が大陸遊說の時佛皇ルイ、フヒリップが格氏に向て、

議院に於ては鐵匠其他の保護黨が非常の多數を制すれば、自由貿易に向て寸步も進むるとさへ甚だ難し。

と白狀せる如く、實に事困難の極にありき。之に引易へ、英國に於ては、佛皇布告の一書大に喝采を博ふし、貿易の範圍の更に擴張せられたるが爲のみならず、また佛皇が愈平和に傾けるの徵候として大に歡迎せられ、數月の前まで讒誣誹謗を極めたる諸新聞の口氣は、手の裏を返すか如く頻りに皇帝を賞贊し、佛人バロシ氏の如きは、格氏に告ぐるに「如斯

き贊辭は、條約をしてます〳〵佛國に不人望ならしむれば、今少し其調子を引下げんとを望む」との言を以てするに至れり。

條約成る

斯く一國の反對の劇しかりしに關せず、格氏の識量精神は皇帝及內閣を扶けて無數の困難を排し去り、布告發布より一週の後事終に結了す。格氏は其日錄に斯く記せり。

「熱中するなかれ」の勸言は智言なりまた仁慈の言なり

一月二十三日　朝八時、條約文中物品目錄の最後の校閲をなさんが爲公使館に到る。午後二時、全權委員一同外務省に會し、書記は英佛双邦の語を以て條約文を朗讀せる後、各記名調印し畢んぬ。余が始めてセント、クラウドの宮に於て皇帝に謁見せるより、三ヶ月は只四日を缺けるのみ、此間樣々の猶豫搖漾等不斷起り來れるか爲、神經の激動殆んど絕間もなかりき。余は今こそ曉り得たり、ダレイランが若年の外交家に向て「熱中するなかれ」と勸めたる言の啻に智言なるのみならず、また仁慈の言なるを。然れども事遂に畢れり。余は深く望む、此事業によりて英、佛二邦の貿易上の關係愈密接し從來の關係を一變するに至らんことを。

條約佛國に公布す

斯くて猶二三語句の未だ精確ならざるものありたれば、再び之を修正して英佛通商條約終に佛國に公布せらる。時に千八百六十年一月二十九日なり。

條約英國々會を通過す

佛國に於て條約の公布せられたる數日の後、英國々會に於て具氏有名なる財政案を提出し、通商條約は反對者の爲めに種々の駁難誹謗を被りたるも、具氏の雄辨快論は一々之を排し去て、議案終に大多數を以て經過す。具氏此時格氏を贊して曰く、

具氏格氏を贊す

十四年前赫耀たる功業を國家に盡したる人物にして、此短縮なる一生の間に然も爵位尊號の以て身を粧飾るなく、また爲に盡す所の人

民と何の區別すべき表章もなくして、而して、茲に二度其國の爲めに限りなく記臆すべき偉大の事業を成すか如きは、實に其比を見ざる所なり。

英國に歸れり

事已に終りたれば、格氏は暫らく佛國の南部に病を養ひ、其三月を以て英國に歸れり。然るに久しく涸竭し來れる家財は此に至りて全く盡き、氏が百方の苦心も其効を見ざれば、親友數名相議して四萬磅の金を贈り以て其急を救へり。此時氏は其一人に書を予へて曰く、

家政困難

吾兒曹の行末を思へば、余が頭髪は白くならんとす。若し彼等に對する職分よりすれば、余は國會を去りて、年に二千磅位儲け得べき公務に就かざるを得ず。然れども余は今日に於て國會を去るの宜しきを見ず。斯くの如き場合に際して、一家の困難を世間に表白せざるべからざるは、實にパブリック、マン(公人)の一不幸なり。

氏か心中察すべきなり。

第十三章　英佛通商條約　下

稅法細則

英佛通商條約は已に成れり。然れども其尤も困難なる稅法細則は更ゝ其勞を要せざるべからず。外交上の部分已に完了せりと雖ども、更に緻密なる貿易上の部分は未だ大躰を畫したるに過ぎず。例せば其第一條に於て、皇帝は「英國の製造產出にかゝる諸物品の輸入稅は、如何なる場合に於ても三割を過ぐべからず」と署したれども、三割の輸入稅ハ殆んど禁制と同樣にて、只之を左右すべきものは、其第十三條に「前條に於て

格氏が此條約に滿足したる所以

大綱已に定まりて之を引下ぐるは英國の力にあり

畧定せられたる所は、尙第二次の會議によりて夫々の稅額に改定すべきものなり」と明記しあるのみ。されば其決定如何は一に二次會の心にあるなり。

蓋し格氏が此條約を以て滿足したる所以のものは、大に事情の然らしむるものありしが故なり。何となれば從來佛國に行はれ來れる所は專賣保護の極點にして、直ちに此障壁を壞破し、大鐵匠、紡績工、毛織製造者等に向て「爾等は專賣より直ちに自由競爭に移らざるべからず」と告ぐるは、殆んど帝位をも震動するものなればなり。之を以て皇帝は其極多點をば三割より下に引下ぐる能はず。只大綱已に定まりて後、成るべく之を一割稅に近く引下るは、是れ英國の力にあり。格氏は能く之を知れり、皇帝及ルーヘー氏は必其信ずる所に背かざるべきを知れり。

四月の始め格氏はたま〳〵倫敦に至れるに、政府は稅法細則整定の爲め、將に委員を佛國に派出せんとし、已に稅關より一名商務省より一名の委員を撰定し、猶一名の委員長を定めんとするの時なりき。蓋し政府は、曩に格氏が特命全權大使となりて佛國外務省と談判したることなれば、今氏を稅則整定委員長となし以て商務省と協議せしむるは其品格を傷けんをを憚りて他に人を求めんとなせるなり。然れども格氏は自ら請ふて此に當り、四月下旬再び巴里に到れり。此時氏はセヴァリエー氏よ書を寄せて曰く、

政府が其の任を格氏に托せざりし所以

再び巴里に至る

吾尊嚴を損するなどの事は、左まで余が頓着せざる處なれば、余は自ら請ふて委員長として巴里に來り、事全く成るに及びては、更らに全權委員として此補條約に調印せんと欲せしなり。余は恐る、今余は甚だ困難にして亦面倒なる事業に着手せるを。然れども一度好事業を始めては終りまで追ひ行かざるべからず。若し之を他人の手に渡さば、

一度好事業を始めては終りまで之を

事に損害あるを免れざるべし。

迫ひ行かざるべからず

今回の事は佛國に於ても其先例なきことなれば、佛政府は國中の鉅商老練の貿易家若干名を以て組織する「コンシュール、シュペリユー」なるものを召集し、英國委員と共に稅則を整定せしむるをに決せり。於是格氏は議事の準備として、万般の材料を英國より取り寄せ、盡く之を佛語に翻譯せしむる等の煩雜なる事務に當り、七月末に至りて一先其準備を了る。

コンシュール、シュペリユー

八月商議始まる

格氏の勞働

商議は八月を以て開けり。是より十一月の始に至る三ヶ月餘の間は、夕は英國より材料を齎らし來る數多の商人等に對面して、夫々に其委曲を問ひ糺し、夜は睡眠の時間を節して在英の諸友に焦つなからんをを儆め、朝ハ昧爽より起きて來訪の人に接し、英佛の諸名士と書信を往復し、十一時より其同僚の許に至りて、共に前宵新に得來りたる材料を細

一割稅

三割稅

苦戰

かに點檢して、議論の準備をなし、已に二時に至れば、ワアイド、オルサイ宮の廣間に佛國委員と相會して、舌戰日々四時間の上に渉れり。既締の條約は只綱領を定めたるに過きざれば、今其細則を定むるに當ては盡く改定の勞を要せざるを得ず。格氏ハ一割稅を主張し、佛國委員は三割稅を主張せり。英國の委員は僅々三名に過ぎず、其戰は客地の戰爭なり、其の論ずる所は前宵に聞き午前に呑込みて午後に吐くものなり、彼等は万種の職業をば盡く三名の身に代表し、無數の事實を盡く三個の頭腦に藏め、全英國の天產物製造物に就て、一々明細の說明をなさゞるべからず。佛國の委員は幾倍の多人數なり。其戰は是れ主地の戰爭なり。渠曹の論ずる所は是れ躬自一生の間實地に閱歷し來りたる處を論ずるなり。材料證據手に隨て雲集すべく、防禦の利、攻擊の鋭、皆其手中にあり。加之渠曹の中には、事實に訴ふるを以て足れりとせず、統計表を僞造

鐵稅尤も困難

二十年の昔に返る

し、證據を贋作し以て格氏等の論鋒を摧かんとせる者あけりれば、流石の格氏も一度は怒を抑へ兼ねたるとありき。而して其方種物品の中尤も困難を予へたるは鐵稅なり。格氏は武氏に書を予へて曰く、

鐵匠は、云はゞ佛國の地主なり。渠曹は保護主義の親衛兵なり。富と位階を有するものは大率皆鐵工事業に直接間接の關係を有せざるはなし。銀行商も廷臣も文人記者も監督も僧侶も鐵匠中に坐を占むるもの多し。鐵工一件のリッチモンド公(穀法辨護者中尤も有力なりし人なり)とも云ふべきスクヲーデー氏も委員の一人なり。素より佛國の委員等は皆(商賣の)頽廢(人民の)恐慌等の舊談を持出し、若し保護を撤去せば工人皆苦難に陷るべしとの事を、左も勿躰らしく述ぶるなり。余は、二十年の昔に返れり。

また議院傍聽に赴きたる事を或る一友に報じて曰く、

佛國の議院戰爭二十年前の英國會を想はしむ

立憲政治の昔ならんには條約通過は覺束なし

去る三日間、余は議院に赴きて條約に關する討論を傍聽せり。其光景は我儕が二十年前英國々會に實歷したる當時を想起せしめたり。保護黨は甚だ暴戾を極めり。議員一同余が傍聽席にあるを認むるや否や、余を攻擊するものあり、辨護するものあり、實に往昔の事を茲に再び繰返すの思ありき。斯くて余が苦雨凄々の中に議院を去らんとするや、議員の一人にて自ら保護黨と稱せる某は、余に半傘を分ち、且謂て曰く若し立憲政治の昔ならんには、貴下の條約は到底通過する能はざりしならん。議院の中には之を辨護するもの二十五人とてはあらざるなりと。

實に英國に於てすら幾許の星霜を重ねて始めて成し得たる處をば、一年の間を以て成就せんとすることなれば、其困難なるは言を待たず。而して終に成功を來したるものは、佛國に於てはルーヘー氏、セヴアリエ

本國の恐慌使臣に大妨碍を予ふ

滿廷の大臣皆巴卿の輩に倣ふ

ー氏及格氏が「其經濟的の頭腦を有するに到ては佛國第一流なり」と稱せる皇弟の從弟ナポレヲン親王と英國に在てはグラッドストーン氏ありて格氏を扶けたるに之れ由らずんばあらず。

斯くの如く、格氏か日々肝を碎き腦を枯らして辛苦經營するの時に當り、本國の形勢は實に一方ならぬ妨碍を其使臣に予へたり。千八百六十年の春より夏にかけて英國の人心再び佛國に對する猜疑を起し、巴卿は更に兵備擴張を唱へ、格氏が武氏に向て「大英國中彼程の力ある人物にして、我儕と其趣を同ふするものは、只彼一人のみ」と云へるグラッドストーン氏を除くは滿朝の大臣皆巴卿の輩に倣ひ、外務大臣羅卿は書を格氏に予へて、條約の成功を望むと同時に「歐洲全國に於て以て強大の壓制者に抗し得る者ハ只此一個の(英國てふ)自由鄉あるのみ」なれば、他國の侵襲を受けざらんが爲、ます〳〵兵備を擴張すべきを述ぶ。英國

中間に立ちたる格氏の苦心巴卿に一長翰を寄す

の情態如斯なれば、佛國の形勢また自から騷然として、ルーヘー氏はいたく英政府の擧動を難じ、其中間に立ちたる格氏は、彼我の苦心を一身に負わせられてまた爲す所ある能はず。於是一長翰を巴卿に寄せ、佛國の摸樣を詳述して英國恐慌の虛妄なるを論じ、兵備擴張の無用を說き、更に其地位の困難を述べて曰く、

閣下須らく記臆し玉ふべし、佛國稅則に就ては未だ一物も其稅額の確定したるものなく、一條一項皆盡く双方の委員によりて二割五分までの間に整定せらるべきものなるを。余は敢て佛國政府は英國の亡狀を憤りて條約の款項中に其復讎をなすべしと云はず。然れども若し政府が常に敵對猜疑の容を帶び、殊に英國一般の自由貿易者をして亦常に斯くあらしめば(佛國の眼中よりしては是尤も大事件なり)佛國稅則の細件(稅則の事は皆細件の問題なり)に就き緊要の討論

困難の地位

をなすに當り、余は之が爲めに甚たく不利の地位に置かるべし。また余か常に自由貿易政畧採用を勸説するに當て最利の論鋒と恃める所も之か爲めに其用を奪はるべし。

巴卿國會に演説して格氏に答ふ

此書に接して後數日、巴卿は國會に於て「條約の完結を望むを勿論なりと雖も、條約は素是れ一箇の脆弱なる堡砦にして、專ら此にのみ依賴すべきものにあらざれば、目下の急に應ずるが爲め更に兵備を擴張すべし」と演説す。而して外務大臣羅卿も亦格氏の書を見て、氏に書を送りて曰く、

ラッセルの書

頃日の貴翰より推せば、足下は「兵備擴張は通商條約の整定を妨礙す」となし玉ふが如し。余は之を解する能はず……余は條約の成らんを切望す。然れども我國をば佛國の隨意に放任するを肯んずる能はず。

草案成る

英廷皆冷澹

格氏は直ちに之に應へて曰く、

「我兵備の撤去せられ」「我國を佛國の隨意に放任」するが如き事は萬々余が願はざる所なるのみか、若し必要の場合に臨まば、余は我海上の勢力をして佛國を壓倒するに足らしむるが爲、一億萬ステルリングの巨額も喜んで之を使用すべし。然れども曩に巴卿に書を呈したる時に當ては、佛國が突然海軍を擴張したるの風聞は全く無根にして、我國は誠に安全の地位にあるを知れり。

如斯本國の政府よりは頻りに肘を掣せられ殆ど賣らるゝ如き地位に立ち、一方に於ては佛國人士いたく抗抵して、事困難を窮むるの中間にありて、其忍耐は終に萬障礙に打勝ち、九月中旬に至り稅法草案全く成就す。於是英公使は格氏等が其困難を慮りて連りに止むるをも聞かず、之を英國に送り當局者の校閲を求めたるに、商務大臣は遊船に乘じ去

事全く成就す

通商條約締結は氏が尤も勞働せる所

て其所在を知らず、外務、稅關皆輕忽に附し去て、格氏が一日千秋の思ひに惱み、ルーヘー氏が「余は英國の如き邦が、貿易上の大問題をば、斯く輕蔑し去るを驚くに堪へず」と連りに不平を鳴らせるにも拘はらず、久しく之れを遷延せしが、事終に緒に就き、十月中旬先金屬類に關する稅則に調印し、同十一月中旬其餘の稅則に調印し通商條約締結の事茲に全く其功を畢へたり。格氏が始めて巴里に入りしより、月を換ふる十有三にして事全く終りを告げり。

斯くて格氏は英國より訪ひ來れる武氏と共に佛帝に謁し、旅行免狀の制を緩ふせんことを勸め、武氏に別れて夫人令孃と共にアルゼールズに渡れり。蓋し此一年の勞働は、格氏自ら

余が一生は懶惰なる一生にはあらざりき。然れども未だ曾て昨今終へたる事業の如く辛苦なるものに當りしことあらず。

アルゼールズに病を養ふ

英國商工社會の滿足を博ふす

其の苦悶の胸中を武氏に訴ふ

と述懷せる如く、非常に身躰を勞したれば、暫らく閑を得て病を養はんと欲せしなり。

格氏がアルゼールズに滯留せる間に、稅則は愈英國に公布せられて、商工社會の滿足を博ふし、殊に格氏が自ら進んで此難局に當れる事は公衆の感激する處となり、政府に向て其報酬を促すが如きの聲聞ゑければ、氏は武氏に書を送て曰く、

若し余が巴里に於て成就せし事業の爲め、報酬金を贈らんとするが如き事の尤も微かなる囁きだにあらば、御身願くは、余が爲に之れを止めたまへ……彼談判中政府首領の振舞は、實に亂暴にも自家撞着を極めたる無禮の所爲にして、殆んど余が着手せる事業を遏ぎり、亦佛政府をして其計畫を行ふ能はざらしめたれば、余は、カウレー卿に告たる如く、若し我事業に熱中せるにあらずば、全權の任を放擲して

速やかに家に歸りしならん。然れども余は吾關係せる其事業に束縛せられたり。余は彼輩が底意は我事業の成功を妨ぐるにあらざるかを恐れたれば、爭を仕出して喚返さるゝが如き事なからんことに注意せり。

優渥なる勅を辭す

女皇は格氏の功勞を思ひ、巴卿をして、男爵を受くるとも樞密顧問官となるとも其隨意に任すべしとの優渥なる詔を傳へしめ玉ひしかども、格氏は書を巴卿に寄せて之を辭謝し、其望む所の報酬は、只「通商條約により一層の密接を來せる英佛二國の關係が從來の面目を一新するを眼のあたりに見るの外なき」を述べ尚アルゼールズに止まること數月、千八百六十一年五月を以て英國に歸れり。

ルイナポレヲン如き人物と

人或は格氏の如き自由主義の人物が、ルイ、ナポレヲン如き人物と事を共にしたるを怪むものあり。然れども。是れ一は經濟家は寧ろ實物上を

事を共にしたるは何故ぞ

先にして政治上を後にすると、一は氏が他邦の政治に立入りて一々其非を咎むるが如き事を欲せざりしによるのみ。故に氏は人に告げて曰く、余若し佛國人ならんには、皇帝に抗敵すること決して佛國自由黨に劣らざるべし。然れどもナポレヲンは今佛國民の首領たり。假令吾れ其國民の上に立つ人物の政略目的を嫌忌するとも、彼をして二邦の國民に取て非常の利益を予ふべき事業をなさしむべからざるの理由あるなしと。是以て其心中を察すべきなり。

通商條約の結果

然り而して格氏が如斯千辛萬酸を重ねて成就し來れる英佛通商條約の結果は如何にとなれば、佛國に輸入すべき英國の製造物は、夥しく其稅を減ぜられ、石炭、骸炭、條鐵、生鐵、器械、道具、麻、麻糸等に至るまで著しく其面目を改め、また英國に於ては、佛國より輸入する萬殊製造物の課稅を拂ひ去り、また大に酒稅を減少し、後氏が

茲に奇妙の事實とも云ふべきは、其社會の組織及政治の主義よりするも、世上尤も民主的なる彼佛蘭西は、殆んど貴族富豪の消費すべき物品にのみ力を用ひ、世上尤も貴族的なる英國は、一般平民の快樂となり利益となるべき物品の製造に心を注ぐの一事なり。されば此二邦の人民は互に其製造物を交換するに尤も相適すと云ふべきなり。

と演說したる如く、有無相通じ、剩缺相補ふ貿易上の大利益を來したるを疑ふべからず。若し夫れ此が爲めに二邦の平和の緒を開きたるに至てハ、格氏が到底の精神即此處にあり。

第十四章　終暮の五年間

今や格氏は齡已に六十に近き、過度の勞動をなしたるが爲めに、健强なる躰格も頽然として、齒搖き、髮染み、聲また嗄れ、氣は志と伴ふ能はず。悄然其友に告げて曰く、

己が身上に限界を立るは、人の好まざる所なれども、余は眞實を語らざるを得ず、余が事は殆んと畢れり。數年前已に一生の頂點を過ぎてより、余は著しく精力の消耗したるを覺ふるなり……若し世間普通の人々の如くして餘年を送らば、長生を得んこと必然なり。然れども是れ果して望むべき事歟、寧ろ短命にして終るも、聊か力に不相應なる事をなすを以て滿足すべきか、是れ困難なる問題なり。

是れ實に困難なる問題なり。惟ふに格氏は前者を擇みしならむ。然れども安息は氏が運命にあらず。實に其終暮の五年間は、內には兵備冗費を

も煩紛の時期

論駁し、外には國際の關係を平和に保たんとする尤も煩紛の時期なりしを見るなり。

南北戰爭

千八百六十一年北米聯邦大に亂る、世に南北戰爭と稱するもの是なり。格氏は常に聯邦を以て平和の摸型となせり、然して其摸型は今や一箇の修羅場と變じたり。是れ氏が尤も心を痛ましめたるの一事にして、其書翰に徵すれば、最初に於ては氏もまた南部加擔者の一人なりしが如し。此れ氏が奴隷主義を維持せんとするが故にあらず。然れども北部先づ南部の分離を拒絶して終に戰爭を引起したれば、曲は恰も北部にあるが如く見ゑたると、一は格氏は常に經濟家として同感を起せるとにして、其奴隷主義を有するに拘はらず、南部は素是れ自由貿易の味方なるを以て、其同感は自から此に向はざるを得ざると、此かる因由よりして、氏は聊か北部攻擊の氣味をあらはし、武氏と共に新聞記者モットレ

最初に於ては南部黨の一人なり

其の由緣

武氏格氏を諫む

雲霧消散す

ー氏と會食せる時、格氏は物氏が激烈なる筆鋒を以て頻りに南部を攻擊するを論駁せり。然るに武氏は滿腔の熱血恰も非道なる奴隷主義の爲めに沸騰し、北米聯邦の破裂は全世界の自由の氣運をも遮り盡くすべき大障礙なるを洞見したるの折柄なれば、其坐に於ては一言も發せず、已に家を出でゝピッカディリーの街を下る時、武氏は格氏に向て其南部に加擔するの徵候あるを切諫し、先兵戈を動かしたるは南部なり、奴隷主義を擴張するは南部なりと、且つ歩し且つ論じて格氏を諫めたれども、氏は醒めんと欲して猶未だ夢中を出る能はず。尋てロックデールに演説するの時に及んで、武氏は最後の一推を加へて曰く、今こそ御身が明瞭なる聲を以て發言したまふべきの時なりと。於是格氏の心胷を蔽ひたりし雲霧は拭ふが如く消散し、北米戰爭は即ち貴族主義か民主々義に叛抗するものなるを確認し、或は國會に中立の主義を張り、或は

再び巴卿と隙を開く

書を北米の諸友に寄せて其氣聲を奬勵したるにぞ、再び隙を巴卿の一派と開き、格氏は武氏と共に「米國議員」の諢號を招きたり。

萬國海上律

此の戰爭より延て英國政治世界の大問題となり、格氏が全力を擧げて論鋒を向けたるは、萬國海上律なりき。此問題に付格氏は、兵戈の時たりとも、港を封鎖し商船を抑ふるの非なるを論じ、翌年の始め「ヘヽリー、アッシウヨルス氏に寄する書」てふ一小冊子を公にして、

小冊子、六三大改革

第一、戰爭中たりとも、兵艦は決して海上に於て私有財産を取押ふべからざる事。

第二、戰時禁制の物品(例へば軍器其他軍用物品)を除き戰時の封鎖は、只海軍兵庫、及偶陸上に接戰ある都府に限るべき事。

第三、縱令戰爭中たりとも、兵艦は決して洋中に於て中立國の商船を搜索すべからざる事。

萬國の公害亦英國の害

從來の惡法に於て右の三大改革を行ふべきを主張せり。是れ何となれば、現行海上律は、獨り正理に背き万國の公害となるのみならず、單に英國より見るも、貿易の障礙となるを夥しく、例せば南北戰爭によりて英國は綿絮の饑饉を生じたるが如きの弊あればなり。

英佛の間再び不穩

一方に於ては米國の紛紜已に如斯なるに際し、英佛の間再び穩ならず、次第に恐慌の生じ來るが如き摸樣なるにぞ、格氏は「三恐慌」なる一小篇を草して「千八百四十八年にも恐慌あり、五十三年にも恐慌あり、六十二年にもまさに恐慌あらんとす。然れ共此皆空音のみにて、一も實際の結果を生じ來るをなし。此に對して兵備を擴張するは、ます〳〵兩國の間を乖離せしむる所以なり」と、一々事實に徵して英國人心を安んじ、亦國

小冊子、七

巴卿と激戰す

會に在ては、開會の始めより終りまで、巴卿と接戰して殆んど一日を空ふせず、其終局に近く頃には、傍觀者の評せる如く、殆んど一騎打の血戰